今や世界を擧げて一大變革期に入つた。列國は何れも國家主義の基盤の上に、夫々自國を近代國防に適應する如く立て直しつゝある。皇國日本の現情は果して近代國防の要求に適應して居るだらうか。

八　經濟戰略

近代戰爭が大規模なる國力戰である以上、平時のあらゆる産業は何れも國防戰爭の基礎たるものである。從つて是等殆んど全部の産業及金融等は戰時急速なる國家總動員の實施によつて、戰爭目的に合する如く一元的に統制運營せられなければならぬ。之が爲めには、國家は平時から一般國民の經濟生活向上を目標とすると共に、國防の要求をも基礎として、經濟運營の全般に亙り必要なる統制を施さなければならぬ。現下國民經濟の行き詰りを打開すると共に、近代國防の要求を充足する爲め、經濟の國家統制を實施しなければならぬことは誠に自然の勢ではあるが、獨占的支配的立場に在る産業經營者又は金融業者等の營利の目的のみの爲めに、國民全般の經濟生活の向上や國防上の要求を度外視して統制を進むることは斷乎として之を排撃しなければならぬ。

言ふ迄もなく國家は國民全般の經濟生活の改善に依て、國民の國際間に於ける平和的經濟競爭に優勝する精神力と體力とを向上することを得るが、一朝有事の際、かゝる國民能力の昂揚が最も偉大な效果を擧ぐることも亦絮說の要を見ない。

一國經濟に對する國防上の要求は、多方面に亙り複雜多岐なるものがあるが、就中食糧供給の豐富なること、兵器彈藥材料其他軍需品の生産力の充實及其の偉大なる發展性を保有することは最も緊要である。我國の現狀に照して見ると食糧問題は比較的樂觀し得るが軍需品の生産能力に至つては、輓近長足の發展を遂げつゝありとは言へ、未だ決して十分ではない。將來は特に軍需工業の骨幹たり羽翼たる重工業、機械工業、化學工業等の一層發展を期さなければならぬ。而も之等工業の組織と經營方法は徒に企業者の利益を目標とするものでなく、之を國家的のものたらしめ、且つ東洋開發の使命を盡す爲めに合理的經濟的の發展經過を取らしめねばならない。

更に又、國防上の見地より戰時經濟封鎖の場合を考慮するときは勿論、平時經濟の見地からも、一國の經濟が過度に海外諸國に依存するの危險若くば不利なることを思はなければならぬ。之が爲め、我が國の生絲産業の如きは早晩何等か有利の轉換を必要とするものである。之等に關しても十分な國家的檢討と國策樹立の必要がある。

敍上の如く戰時は固より平時に於ても、國防上統制經濟の實施は必然的要件であるが、交戰國は單に自國の經濟を統制して戰爭の自給自足を圖るのみならず、進んで敵國の經濟を打破し、其の國家組織を崩解し、或は少くも敵國をして戰爭遂行を不可能又は困難ならしむる如き目的の爲め、攻勢的な經濟戰略を實行することが肝要である。

經濟戰略として普通認められて居るものは

一　武力を以てする敵國領土資源の占領

二　武力又は謀略によつて誘發する直接行動を以てする敵國重要資源の破壞

三　武力を以てする敵國經濟の封鎖

四　長期大規模の持久戰により敵國經濟を疲弊せしめ、思想攻撃と相俟つて敵國組織の崩解

等であるが、是等の戰略の外に、將來戰爭に於ては、經濟の直接運用による經濟攻撃作戰が實施せられるであらう。之が爲め如何なる作戰を採るべきやは、交戰國が其の平時から用意する所に基いて自主的に決定すべきものであるが、佛軍經理將官ラポート氏は之が爲め

一　重要資源又は特殊品等の買占め

二　敵國市場の攪亂

等を指摘して居る。今此の種經濟攻撃作戰として考へられるものは

一　貿易方面

1　放下資本竝に貸借關係の急劇なる移動

2　某商品の世界實需に影響ある程度の大量投機（買占、獨占高價格販賣强行

等）

3　某國にとつて致命的必需品の供給攪亂の爲めにする策動

4　某國貿易決濟資料たる產業部門製品に對する人爲急劇なる競爭生產竝に投賣強行

二　運輸方面

1　傭船、船舶供給に關し攻勢的策動

2　新造船、中古船需給に關し放下資本の威力利用

三　通信方面

國際通信網に於ける放下資本の威力利用、又は之に對する妨害政策の強行等であるだらう。其他、思想戰部門を通じて作用する經濟攻擊の威力は往々にして強烈なる效果を發揮するものである。

風雲將に急ならんとするに方り、豫め準備する所に基く神速積極なる經濟攻擊の果敢なる遂行は場合によりては、戰はずして既に敵の戰意を挫き、然らざるも戰爭の推移に重大なる影響を及ぼすに至るであらう。今や武力戰と併行して經濟戰が國防の重要なる一作戰部門であることは、世界列强兵學界の通念となりつゝある。我が國將來の國防に於ても、攻防兩方面の立場に於ける經濟戰略の十全なる用意を武力戰方面と相應じて力强く進めて行く必要がある。

獨逸アドルフ・カスパーリ博士は、過去諸戰役の史的考證を基礎として著述したる「經濟戰略と戰爭指導」の結論に於て叫んで曰ふ

「歐洲に於ける將來の戰爭は頗る機動的で、會戰は少ないが不意の急襲が多く、而も經濟的情勢と政略とに關係する所甚しく、會戰間隔は長くて、合縱連衡は策せられ、經濟及政略によつて戰爭の勝敗が決せられるであらう」

「經濟上の關係は少くも軍事上の關係と同樣に重要なるを以て、戰爭指導は常に理論的に軍事的破壞目的のみを企圖しないであらう。即ち經濟戰が同時に遂行されなければ

ならぬ。而も自國及中立國の經濟を深く考慮に置く必要がある。茲に於てか利用せられるあらゆる手段の均衡と云ふことが戰爭指導の最高要訣である」

カスバーリ博士の此の結論は、將來戰の戰爭指導の要訣が、武力、經濟、政略等各作戰部門の一元的調和統制と云ふ點に在ることを吾等に敎ふるものである。

九　思想戰竝に政略戰

世界大戰に於て思想戰が武力戰、經濟戰と肩を竝べて擡頭し、近代國防戰爭の重要なる一部門となつたのみならず、平時に於ける國家相互間の生存競爭上にも重大なる役割を演じつゝあることについては、本年二月當部發行のパンフレット「思想戰」に於て既に之を述べて置いた。

內は以て國民經濟生活の安定を計り、社會不安を一掃して以て國民の思想を統制し、外は以て適切巧妙に國策遂行の障碍を打破するは、之を十全なる思想作戰の活躍に俟たなければならぬ。況んや敵の戰意を挫き其の國家組織を崩解するは、固より大規模にして強力なる思想戰の效用に負ふ所が多い。

其他、一見平和工作であるかの如き外交政略も、近代國防戰爭の本質が國家相互の生存競爭の白熱化其のものであることを考ゆるならば、之を戰爭の一手段として運用しなければならぬ甚だ多くの場合を發見するであらう。

例へば、第三國を我が與國として參戰させ或は少くも之を好意的中立國たらしめ、敵を孤立に陷れて以て戰はずして既に勝を制するが如き、或は相手國を其の與國と離間し先づ相手國と結んで不侵略を約し、其の與國を各個に擊破したる後、徐ろに相手國を伐つが如き、或は合縱連衡の妙用により一大勢力を結成して、以て戰はずして天下の大勢を支配するが如き、皆之を一の國防手段と見るべく、孫子の謂ゆる敵を其の謀に於て伐ち、若しくは敵の交を伐つものである。蘇聯邦の不侵略條約、佛國の小アンタント及ポーランドとの勢力結成、嘗て英米が支那を使嗾して爲さしめたる排日侮日、支那の傳統たる夷を以て夷を征するの策、最近日米の間を離間せんとする某國の策動等比々皆此の

類であらう。豊太閤の天下諸侯を征討する亦概ね此の筆法によつて居る。

又思想戰略、經濟戰略、武力戰略と直接關連する特殊の外交政略に至つては、其の勢を成し效を奏する所、當に之を國防戰爭の一手段と見なければならない。例へば英米のワシントン條約、ロンドン條約、九ケ國條約の締結、支那の排日侮日政策。英の日印條約廢棄、蘇聯邦の極東赤化政策等皆之に屬するであらう。

此の種の政略戰は風雲將に急ならんとし、殊に武力戰の端緒既に開かるゝに及んで、愈、其の白熱度を加ふるに至る。之を平和工作と見、之を單なる外交手段とのみ觀じ去るは、餘りにも不用意であつて、其の間に乘ぜられるの隙があると謂はなければならぬ。宜しく近代國防戰爭の一部門たる政略戰の本態を認識し、周到なる用意と充實したる氣魄とを以て之に臨まなければならぬ。來らんとする海軍條約改訂の如き、當に其の好適例であるだらう。宜しく擧國一致此の政略戰線に勇奮必勝を期しなければならぬ。

十　皇國の近代的國防準備

單に武力戰爭の自給自足の爲めのみから考へても、皇國の國家總動員準備は尙ほ未だ甚だ不完全である。況んや近代國防戰爭の本質に鑑み、武力戰、經濟戰、思想戰、政略戰を一元的に統制運用し、全戰爭の指導を適切にして以て速に勝を制する爲めには、皇國は、尙ほ幾多の施設と準備とを必要とするであらう。況んや戰はずして既に勝を制せんとするに於てをやである。

國防は今や政治、經濟、思想、敎育、宗敎、藝術等を離れて成り立つべくもない。祖國は、世界大戰の生んだ國家總動員の觀念より更に一步を進めて、廣汎なる各部門に亘る近代國防の基礎を根本的に確立せねばならぬ。そは獨り軍部のみの事業ではなく、實に國民全體の責務であらねばならぬ。

戰時に對する戰力の統制に就て

昭和九年一月四日
陸軍省軍事調査部

戰時に對する戰力の統制に就て

目次

一　前言……一頁
二　各國總動員準備の概要……三頁
イ　米國……三頁
ロ　蘇國……四頁
ハ　佛國……五頁
ニ　英、獨、伊……五頁
三　我國總動員準備の大觀……六頁
イ　精神動員……七頁
ロ　人員動員……九頁
ハ　產業動員……一一頁
a　不足資源の補塡……一二頁

b　過剰資源の對策……一四
c　工場動員……一四
ニ　貿易管理……一七
ホ　金融動員……一八
ヘ　其他……二〇
四　結言……二二

戰時に對する戰力の統制に就て

一　前言

使用兵力少く裝備亦簡單にして戰爭の規模狹少であつた往時に在りては、動員は主として陸海軍の範圍のみに止まり、爾他百般の諸施設に至つては、格段の變革を要しなかつたが、世界大戰以來徹底的に科學化せる裝備と、膨大なる動員兵力とを以て持久に陷り易き特性を有する近代戰に對しては、精銳なる國軍を骨幹とすべきこと勿論であるが、更に國家國民の全智全能を擧げて、國防に當るを必要とするに至つた。從つて巨大なる軍の需要を充足すると共に、可及的範圍に於て國民生活を確保し、軍民一體能く戰爭の重壓に堪へて、其目的の貫徹を期せんが爲には、國防に關する一切の要素を精査して、國民精神の指導、不足資源の補塡、經濟機構の改變等戰時資源の統制運用に關し、平時より各般の計畫施設を完備し、戰爭の當初より一貫せる方針に基き、整然たる戰爭指導を爲すの必要を生じた。

戰時に對する戰力の統制とは國を擧げて行ふ戰爭準備即ち總動員準備であつて、軍の戰力を保持增强すべきものであるから、其完成を見ない限り、軍自體の戰爭準備が如何

に完備しても、近代戰に應ずる眞の完全なる準備と謂ふことは出來ない。我國の如く軍需資源に乏しく、且工業力が未だ所望の域に達して居ない國に於ては特にそうである。

軍備は平時に於ては之を最少限度に保有し、國際情勢の急迫に伴ひ神速に國の堪へ得べき最大限度に擴充し、莫大なる軍の需要を完全に充足して、速戰即決、速に戰爭を終局に導くを以て理想とするのであるが、國を擧げて行ふ此戰時態勢への轉移を整々に し、全國力を打つて一丸とし、之を戰爭遂行の一點に集中發揮せしむることが、即ち總動員であつて、特に我國の如く少數の平時兵力に甘んせなければならぬものに在つては、此準備の完成を俟つて始めて將來戰に於ける戰勝の光明を確信し得るのである。加之總動員準備は、其計畫の進捗に伴ひ、不足資源の開發、過剩資源の消化及發明研究の氣運を促進し、延いて巨額に上る軍需品の死藏を節約し、更に非常時統制經濟の對策を講せしむる等、平時國の經濟的發展に貢獻する效果も亦決して尠くないのである。

世界大戰に於て、總動員に關する準備を缺き、塗炭の苦汁を滿喫した列强は、一面軍縮に依る缺陷を補はんとして、齊しく皆、經濟的間接戰備たる本計畫の完成を急いで居る。一九三六年前後の全面的危機に加ふるに蘇國の赤化工作は其鋭鉾を東洋に進め國力の發展に伴つて活動漸次活潑となり、又歐米諸國の支那に對する利權獲得運動は彼をして愈、

抗日侮日に狂奔せしめ更に米蘇、蘇支の國交恢復となり東亞を蔽ふて暗雲低迷、我國をして重大なる決意をなすの必要に迫らしめつゝある此時局に處すべき我非常時對策は、軍備の擴充を以て第一要義とすべきこと勿論ではあるが、更に速急に他國に優先して國防に關する各種要素を總動員し、來るべき危機に備ふるの準備を完成しなかつたならば、彼の或は豐富なる資源と、偉大なる工業力とを有し或は膨大なる平時兵力を擁して尙且戰備に汲々たる隣邦列强に對し、我戰爭準備は甚だしき缺陷を有するものと言はざるを得ない。

二　各國總動員準備の概要

イ　米　國

陸軍省所管　總動員業務は陸軍省の擔任に屬し、陸軍次官主管の下に數個の補給部局を設け、關係各省及民間團體之に協力して、專ら重點を軍需品の補給統制に置き、調査、研究、補給計畫竝戰時諸機關の編成等に關し、徹底せる具體的準備を進めつゝある。

總動員法、産業大學　一九二六年上下兩院に提出せられた總動員法案は、大統領に資源統制の獨裁權を賦與せんとするものであるが、未だ制定公布を見ない。然れども、工業動員の要員と思惟せらるゝ豫備兵器將校の外、特に産業大學を設置して産業動員統轄要員の養成に任じて居る。

戰時に對する戰力の統制に就て

國防記念日、教育註文制度　又一九二四年以來國防記念日を設けて一般國民に對する總動員演習を實施して居る等吾人の注意を惹くものが少くないのみならず、一萬數千個の民間工場に對しては、平時より教育註文制度に依て、兵器の製造に習熟せしめ、戰時是等の工場が命令一下直に軍需品の製造に轉換擴充し得る如く周到なる計畫を準備して居る。

ロ　蘇　國

國民生活極度の壓迫を意とせず、國防勞働會議、國家計畫委員會に於て、第一、第二次の產業五年計畫、換言すれば總動員計畫を立案し、各省は其擔任に從ひ、銳意之が實現に向つて驀進しつゝある。

重工業の重視　第一次五年計畫に於ては、國防の完備は軍隊及國民の訓練と共に、產業の發展に俟つこと大なりとなし、國民總收入の三乃至四割に該當する累計九百億留の巨額を投じ、特に重工業を重視して、工業に於ては二乃至三倍、農業に於ては一倍半に其生產力を增加せしめつゝある。

第二次五年計畫に於ては、累計千四百乃至千五百億留を以て、國民經濟の再組織を完成し、其全部門に亙り最新の技術的基礎を創造すべく將に其第一年を終らんとして居る。本產業計畫の成果が、蘇國當初の企圖に副はなかつたことは明であるが、其電化事業又は機械工業等に於て、一段の進步を見たることは事實であつて、特に其工業地の中心が、逐次東漸の勢を示して居るのは、吾人の最も關心を要する所である。

ハ　佛　國

高等國防會議に、研究委員會及常置事務局を附して、總動員計畫を設定し、各省は各、其擔任に從ひ、具體的細部計畫を立案して居る。

總動員法　一九二八年上下兩院に於て可決せられたる國家總動員法案は、全國民の國家防衞義務及政府の資源强制取得權等を規定せるものであるが、未だ公布せるゝに至らない。

工業動員管區　然れども官公吏及豫備役將校に總動員業務の教育普及を圖り、又廣く人材を網羅せる軍需工業顧問委員會を陸軍省內に設置し、又工業動員管區を設けて總動員の實施を容易ならしむる等、歐洲政局の不安增加に鑑み、徹底的對策の確立を期しつゝある。

ニ　英、獨、伊

英の國防大學、伊國の總動員法　齊しく總動員準備に汲々として居るが、英國は國防大學を設け、一般官公吏及將校等に對する總動員の教育機關たらしむるを特徵とし、獨逸は純然たる總動員準備をも禁止せられて居る爲、國民の體育を奬勵し、且、民間航空及機械竝化學工業等を進步發達せしめ、戰時直に軍需工業に轉換利用せんことを期しつ

ゝある。特に伊太利は、其特殊の國情に基き、國防最高會議事務局、産業事務局、産業動員局を設置して、總動員を計畫準備し、一九二九年既に總動員法を制定公布した。

三　我國總動員準備の大觀

軍需局、國勢院　世界大戰に於ける各國の苦き經驗に刺戟せられたる我國は、總動員準備の必要を痛感し、大正七年軍需局を設置し、更に之を擴張して內閣統計局と合併し、國勢院を設立したが、我國情に即せざるものありし爲之を廢止し、昭和二年新に內閣資源局を設立して今日に及んだのである。

資源局　資源局は內閣總理大臣の所管で各省特に陸海軍と密接に連繫し、人的、物的資源一切の統制運用に關し、主として戰時計畫を樹立し、以て戰時に於ける軍の莫大なる需要を充足せしむると共に、國民生活の需要をも考慮する擧國一致の資源的戰爭準備を司掌せる機關である。

總動員に關する平時法令　我國に於ては、未だ總動員法が制定公布せられて居ないが、大正七年公布せられたる軍需工業動員法は、戰時に於ける軍需品工場、事業場の管理使用收容竝軍事輸送機關、又は政府の管理する工場、事業場に對する全國民の强制徵集等を規定して居る。本法は其範圍を軍需工業動員に限定し、且內容が甚しく不備である爲、之を總動員法として視る場合に於ては、頗る不完全なるのみならず、未だ施行の態樣さへも整へあらざるを遺憾とする。但資源調査に關しては昭和四年資源調査法令が公布せられて以來其狀況を明瞭ならしむることが出來た。

以下若干重要事項に關し、總動員が如何に計畫準備せらるべきかの概要に就き說述する。

イ　精神動員

戰鬪の勝敗が物質的威力を凌駕する軍の精神的威力に依て決せらるゝ如く、近代戰に於ける戰爭の終局も、亦物的資源よりも人、特に其國民精神に依て決せられるのであつて、世界大戰に於ける露國の崩壞が國民精神の腐敗動搖に依つたことは周知の事實であるが獨逸敗戰の主因も亦實に此に在つたのである。即ち大戰の末期に於ても、獨軍は精鍊なる將兵と優秀なる裝備とに依り、各方面の戰鬪尙有利に進展しありしに拘らず、銃後を守護すべき一般國民の士氣倦怠し、戰爭繼續の意氣喪失せし爲、遂に內部的崩壞に次いで外征軍の敗退となり、戰敗國としての汚名と屈辱的重壓に羈絆せらるゝに至つたのである。

思想戰　又所謂思想戰は、斯の如く銃後の國民若くは出征軍に對し、思想的攪亂に依りて其戰意を減退放擲せしめ、遂に之を敗者に陷るゝものにして、將來戰に於ては武力戰に

併行し、徹底して此種方策が運用せられるから、之が防遏排撃の準備、即ち國民戰意の破碎を防ぎ戰爭長期に及んで益、之を熾烈ならしむると共に進んで敵の精神的團結を攪亂するの準備を整へねばならず。之が爲には先づ日本精神を確立することが必要である。

日本精神の確立　平靜時に於ては大なる波瀾なく一見確立せるが如く思惟せらるゝ國民精神も、戰時に於ては其生活の壓迫に伴つて動搖し、動もすれば不平不滿の念を生じ易い。

然れども、非常時には非常の手段がなくてはならぬ。戰時倥傯の際、萬人をして其意を得しむることは到底爲し能はざることである。

故に個人の利害得失の如き、些々たる係爭は之を總復員後の解決に委ね、能く小我を棄てゝ純正なる日本精神に立脚し、國民をして悉く其職分に應じ、和衷協力の實を擧げしめなければならない。而して此不平を忍び不滿を抑へて國家の統制に服せしむるものは、即ち崇高なる國家觀念であつて、之が確立の爲には、共産主義者の彈壓のみに止まらず、國家の全面に亙り苟くも糜爛せる物質文化の弊を釀成する因子に向つて、徹底的膺懲を加ふると共に、各教育機關を刷新革正し、且全教化團體を糾合して日本精神の鼓吹徹底を期しなければならない。而して戰時國民をして、戮力協心義勇奉公の至誠を披瀝せしむる爲には、先づ平時より農山漁村の救濟、中小商工業の振興、特權階級の橫暴打破等による社會政策の徹底を期し、下は上を怨まず、上は下を苦しめず、相共に國家を淨化し、國民をして其所に安んぜしめなければならない。

滿洲事變勃發以來、變轉極みなき帝國內外の情勢の爲、千波萬波の波濤に搖られたる國民精神も、事態の正視を俟つて漸く沈靜に歸しつゝある。此機を失せず、速に我國是に基く指導精神を確立し、國民をして嚮ふ所を知らしめ、一糸亂れず來るべき危機に備ふるの準備を必要とする。

ロ　人員動員

戰時國の要する人員は軍の所要兵員の外、軍需工業及總動員の要員で莫大なる數に上り、其供給は人員資源に惠まるゝ我國と雖も、決して容易の業ではない。即ち將來戰に於ける參加兵員は、到底日露戰爭に於けるが如き百萬の寡少兵員にあらざるは勿論、軍需工業の要員は、大戰間に於ける各國の事例に徵するも概ね戰場兵員の二倍を要し、更に運輸通信、警備及總動員の執行竝國民生活維持等の爲、多數の人員を必要とするのである。

徵募統制機關の確立　此勞力補塡の爲、大戰間獨逸は祖國補助勤務法を制定して、滿十七歲以上六十歲未滿の男子の使用權を政府に收め、佛國亦、之に倣つて國民動員法案

を準備し、英國は國民勞役法に依り、一般男子を戰時必須業務に服せしむることゝした。其他の交戰國も概ね之に類似し、米國の如きすら徵兵法と登錄法との制定運用に依り、國民は戰爭に赴くか働くか然らずんば監獄に行くか其何れかを選ばざるべからずと爲し、無爲徒食の輩を絕滅せんと努めた。

我國に於ても亦戰時は、健康なる男子は勿論老幼、婦女、癈失者に至る迄、苟くも用ひ得べき者は悉く之を用ひなければならぬから、其募集徵用竝勞力統制の爲、全國に亙り大規模の徵募統制機關の確立を必要とするのである。

召集猶豫、軍需工業動員法による强制徵集　而して人員資源上戰時不足を告ぐる者は、技術職員、職工、船員、及無線電信員等で、其補塡の爲には離失業者の徵募の外、學校工場等、利用し得べき一切の機關を利用して、急速養成に努むるも尙特に開戰當初に於ける需要充足の爲には、已むを得ず兵役關係者と雖も緊要缺くべからざるものに限り、召集猶豫の特例を設け、更に國家の必要に際しては、軍需工業動員法に依り、兵役關係の有無に係らず、何人と雖も戰時に際し軍事輸送機關、竝政府の管理するか又は國の經營に係る軍需品の生産、修理に任ずる工場、事業場に强制從事せしめ得る樣になつて居る。

是れ大戰間各國が國民統制に關する念慮を缺き、兵員と一般勞務員との按配宜しきを得ずして、一旦戰線に送れる職工を再び內地に召還せるが如き失態なからしめんが爲である。

斯かる勞力不足の反面、開戰の當初に於ける經濟界の恐慌は我生絲紡績の如き過剩資源の生産中止手控を來たし、開戰直後俄然多數の失業者が出來るのが常であるから是等從業員を他に轉用することをも顧慮することが必要である。

大戰間獨逸は、開戰後一年を經て失業者の比率が漸く戰前の狀態に復し佛國は失業者の消滅を見る迄に二年餘の長時日を要したと謂ふことである。

勤勞報國　何れにせよ全國民に勤勞報國の精神を喚起し、自ら進んで必須事業に從事せしむると共に、兵役關係者相互間は勿論、非兵役關係者との間に於ても、戰場に出で、死生の巷を馳驅する者と內地に止つて暖衣飽食する者と、其負擔報酬に均衡を保持せしむることは、衆心一致の國防觀念を强化する爲絕對の要件である。

八　産業動員

平時産業は國民生活を主體として一部の統制を加ふるに止るが、戰時産業は軍需充足を第一義として統制經濟に依るを本旨として居る。而して其轉移が整々に行はれなかつたならば、經濟恐慌の波紋を大にし、供給を圓滑ならしむることが出來ずして、戰爭遂行の信念を破壞する。故に平時より戰時經濟の根基を確立し、平戰時の産業政策を調和

して、戰時に於ける軍民の需要を滿足せしむべき準備を完成して置く必要がある。

a　不足資源の補塡

滿洲國の資源を活用し得る現在に於ては、食糧、鐵、石炭の如き戰時必須資源は概ね國の需要を充足することが出來るが、石油、鉛、亞鉛、錫、「ニッケル」、「アルミニウム」、白金、水銀、石綿、「ベンゾール」、「トルオール」、生「ゴム」の如き重要資源で不足するものが少くない。是等不足資源に付ては戰時一層消費節約、廢品利用等の手段を講ずるは勿論、其開發、確保、又は代用品の研究に於て萬遺憾なきを期し、苟くも資源の爲に作戰を制肘し國民を塗炭の苦中に投せざるの準備が必要である。

不足資源の開發　不足資源の開發は我勢力圈内に於て徹底的に行はねばならぬが、之が爲には彼の鞍山製鐵所に於ける貧鑛處理、礬土頁岩に依る「アルミニウム」の製造、又は夏梅鑛石に依る「ニッケル」の工業試驗等、常に新なる資源と新なる方法とを以てする資源開發に著意すると共に、戰時の爲に愛惜すべき貴重なる此種資源を却て平時に於て涸渇せしむるの結果を招かざる爲、豐富ならざるものにありては、平時は隨時所望の如く生產し得る準備の範圍に止めて、輸入原料を使用する生產工場を設け、戰時輸入杜絶と共に直に此内地原料に置き代ふるの著意が必要である。輸入原油による製油事業の如き即ち是である。

資源の保有、回收竝代用　然れども生「ゴム」或は石油の如く、我勢力圈内に於て如何に其開發に努むるも質或は量に於て、我需要を充足し得ざるものは、資源の保有又は代用の途を講じ、尙且不足するものは已むを得ず之を輸入に俟たなければならない。

資源の保有とは、製造會社に於ける原料材料の貯藏等の如く生產又は販賣上の必要に基く貯藏の外、日常に於ける家庭用器具の使用等をも含める謂であつて、彼の「ニッケル」貨幣の如く、平時は資源の死藏に陷らず、戰時は後害を殘すことなして、隨時之を回收し軍の需要に應せしむるを以て理想とするのである。資源の代用とは、亞鉛に代ふるに銅合金を用ひ、揮發油に代ふるに酒精を用ふる等、假令規格を低下するも不足資源を他の保有資源を以て代用せしむるの謂であつて、之が爲には平時より不斷の研鑽を積み且其使用に習熟して居なくてはならないのである。

軍事優先　何れの場合に於ても資源の配當は、軍需充足を第一義とし、資源の爲に作戰を制肘せざるを以て本則とするのであるから、石油の如き重要不足資源に付ては、軍自ら努めて消費を節約し、經濟的に使用することと勿論であるが、更に國内に現存するものは、最後の一滴に至る迄悉く之を軍用に供し民間需要に對しては代用品を以て滿足せしめなくてはならない。

一方近代戰の複雜化は、時として政略上の見地に基く作戰指導を必要とするに至り、資源戰を惹起することが少くない。世界大戰に於ける英軍の「メソポタミヤ」作戰又は獨墺軍の羅馬尼亞作戰の如きは共に資源戰とも觀らるべく、我國に於ても亦其必要の生ずべきことは想察に難くないのである。

b　過剩資源の對策

消化增進、生産轉換　我國輸出の大宗たる生絲（殆んど全部米國に輸出）及紡績（大部は東洋各國に輸出）の如きは、國內に於ける戰時の需要僅少にして若一度輸出杜絕せんか、之に依て生計を立つる千數百萬人は經濟的に甚だしき打擊を受けるから延ては戰爭忌避の觀念を惹起せしむる虞が有る。全國民を驅つて戰爭遂行に邁進せんが爲には、此の如き事態の生起は極力之を防止しなければならない。從つて是等過剩資源に對しても、亦努めて我勢力圈內に於ける消化增進策を確立し、已むを得ざるものは戰時物與すべき各種產業の轉換を容易ならしむることが必要である。即ち滿支兩國に於ける徹底的市場の獲得、又は生絲を以てする羊毛の代用、桑園の轉換等是である。

c　工場動員

工場の新設、擴張と轉換　戰時に於ける工場の生產分野は、需要の變動に伴ひ平時と著しく其趣を異にする。即ち軍需工場の如きは非常の勢を以て新設擴張せらるべきも、生絲、紡績の如きは需要の激減に伴つて閉鎖、縮少せらるゝか又は他の生產工場に轉換するの已むを得ざるに至るのである。而して本邦工場の戰時能力は固より戰爭勃發の推移、及其狀況竝戰時に於ける一般の狀態等に依て異るが近年に於ける工業の躍進を以てするも、尙且戰時に於ける巨額の需要を充足することは出來ない。從て軍需工場の新設、擴張を策すと共に、染料工場又はセルロイド工場の如く容易に火藥工場に轉移せしめ得るものは勿論、其他の工場でも萬難を排して軍需工場への轉換を圖らなければならない。

我國に於て最も多數を占むる生絲又は紡績工場に於て特に其必要を感ずるのである。

此外、家內工業の徹底的利用、工作機械の改良等、生產能力充足の爲、平時より周到綿密なる計畫を樹立することが必要である。

工場の管理、使用、收容、產業系統の確立　斯くして得べき軍需工場の大部は戰時、軍の管理、使用又は收容工場として、軍の使用に供せられ、又調辨工場として直接軍需品の製造をしなければならぬから、軍民の需要を顧慮し軍需品と一般需要品との生產分野、換言すれば軍需動員工場と總動員工場との限界を明瞭ならしむる必要が有る、又近世工業の複雜化に依り數個の段階に依る廣範圍の下請又は部品工場を必要とするものが

少からずあつて動もすれば生産系統を無節制狀態に陷れ、製造上の隘路を構成する處があるから、需要の緩急に應ずる生産分野を決定し、産業系統を確立する爲全工場に對する統制を強化せなければならない。

企業の合理化　之が爲には企業組織を改變し、重要なる産業は平時より各業種毎に生産機關を統合して企業の合理化を圖ると共に、戰時の統制を簡易ならしむることを必要とする。戰時獨逸が殆んど其工業の全部を「カルテル」化せるが如き、或は伊太利が現に平時より全産業を組合組織化せるが知き、固より利害得失はあるが、共に他山の石とするに足るのである。我國に於ても製鐵合同を始め各種の生産、販賣組合設立せられて居るのは統制上大に喜ぶべき所であるが、反面消費者の立場を考慮せず獨占企業の弊を暴露しあるものが少くないのは頗る遺憾とする所である。

教育註文制度　而して是等の諸工場中、戰時急速に需要の激增するもの若くは新に軍需工場に轉換せらるゝもの等は其生産能力を精査して戰時轉移の準備を整へ特に教育註文制度に依り、平時より軍需品の製作に習熟せしめ、且成し得れば設計圖、及工檢具等を整備して、戰時轉移の完全準備を圖ること必要である。

規格統一　又軍用と一般民衆用とに依る成品規格の不統一は、相互の流用を妨げ大量生産を許さずして、原材料は勿論設備上に於ても亦無駄を生じ、所要補塡額を累加せしむるを以て相互に甚だしき利害得失の衝突を見ない限り、規格を統一して彼此融通に使ならしむることが必要である。

二　貿易管理

東亞經濟聯盟　戰時貿易は主として我勢力圈内又は與國との間に限らるゝが故に、日滿經濟「ブロック」を擴充して東亞經濟聯盟を結成し、努めて戰時に於ける我經濟圈を擴大して資源の有無相通を容易ならしめなければならない。我經濟圈を亞細亞より太洋洲に及ばしむることが出來れば主要資源中生絲、石油、「アルミニウム」等の輸出入を除き、他の原材料の自給に大なる苦痛を感ずることなく貿易額は少くも平時の半を維持し得べく、之を亞細亞の範圍に止むるときは更に羊毛の輸入杜絶し、貿易額に於て若干の減少を見るのみである。而して平時に於ける貿易の對照を戰時豫想する我勢力圈外に求むるに從ひ、戰時貿易への轉移益〻困難となるから、平時貿易の對照も亦努めて戰時の要求に合致せしむるの著意が必要である。但我勢力圈内に於て有無相通じ得ざる不足竝過剩資源は、平時に於ける對象を努めて本圈外に求め戰時に於ける對策を確立し置くべきことに關しては既に述べた通である。

貿易管理機關　戰時に於ける本貿易實施の適否は、直に國家の戰力及國民生活に影響する所が大であつて、平時に於ても我輸出貿易の飛躍に依る經濟鬪爭の激化は、至る所に經濟黃禍を絕叫せしめ、戰時我の欲する與國をすら經濟的敵國に加盟せしめんとする實情なるに鑑み、特に戰時に於て新なる貿易の管理機關を設置し、政府の行ふ輸出入は勿論一般貿易業者にも鞏固なる統制を加へ、我外交折衝と相俟ち貿易對策を誤らないことが必要である。

之が爲平時より國家內外の資源狀況を明にし、國際情勢の機微を捉へ、戰時第三國は勿論之を介して敵國をも資源的に利用し得るの準備を爲しおくことが必要である。

ホ　金融動員

戰費　戰費は戰爭の規模、期間等に依つて異るが世界大戰に於ける實績に徵するに平均年額獨逸は三百四十一億「マルク」、英國は十七億五千萬磅、米國は百三十一億弗の巨額に達して居る。從て將來戰に於ては我國に於ても日露戰爭に於けるが如き小額（全期間を通し約十五億圓）の戰費に止まり得ざることは明瞭であつて之が調達法たる增稅竝公債は各利害を異にする爲、我國情に照らし其調和を圖らなければならないが、大戰間に於ける主要各國の公債は、其募集年額百二十億圓乃至三百億圓に達して居る。

全準備　此巨額の戰費の大部は我勢力圈內に支出せられ、圈外支出は其一小部分に過ぎずして對外支拂の外、全準備を必要としないから、假令外債募集の不調を前提としても、之を以て直に戰爭を忌避するは當を得たものとすることは出來ない。但日銀の現在に於ける金保有量の程度を以ては滿足出來ないこと勿論であつて、之が對策は先づ本邦產金の海外逃避防止を以て第一義とするのである。

通貨の膨張、物價騰貴　戰費の國內支拂に伴つて必然的に通貨の膨張を來し、延ては物價の騰貴を誘致するも戰費は年々數度に分割支出せられ、之に併行して內債も亦逐次募集せられるから、通貨は循環運行して過度に膨張することなく、物價騰貴も亦從て某程度に之を抑止することが出來る。世界大戰間に於ける各國の通貨は、概ね平時の二倍半乃至十倍に膨張し、物價は供給狀況に依り著しく異るが概して二倍半乃至五倍に騰貴した。我國に於ては食糧、鐵、石炭等戰時に於ける最重要資源は概ね充足し得らるゝ狀況に在るから其處置宜しきを得ば、通貨の膨張は勿論物價の騰貴も亦之を最少限度に抑制することが出來る。

特設金融機關　此の如く戰爭を目標として金融界を總動員し、努めて之を正常に維持するが爲には、現金融機關に對する統制力を强化する外、金融組織變更の要否を考究し

て、其對策を誤らないことが肝要である。然らざれば經濟界は動搖、恐慌を反復して常なく、總動員の全面に波及し遂には國の戰力を萎微衰退せしむるに至るのである。之が爲大戰間米國が特殊金融機關を設置して戰爭遂行上特に發展を必要とする企業に投資せしめ、或は獨逸が貸付金庫を新設し農產物、商品等を擔保として一般に融資せしめたるが如きは共に吾人の大に參考とすべき所である。

へ 其他

a 運輸通信

戰時陸海空の運輸機關に對する軍民の需要は著しく增加し通信機關も亦頗る繁忙を加へるであらう。故に國の動脈たる是等機關は其補塡方策を確立し各、其特性に應ずる統制法を適確ならしめ以て物資竝通信の流動を阻止停滯せしむる結節を構成することなく開戰の初頭より整然たる流を形成せしめる準備が必要である。

b 技術動員

發明研究は軍の作戰資材たると國民の生活資源たるとを問はず、極めて重要なる事項なるを以て、平時より全研究機關を統制し、國の必要に基き之が運用を講ぜなくてはならない。先般發表せられたる國家重要研究事項の如きは即ち其端緒なりと謂ふことが出來る。

c 警備

戰時陸海空に對する警備の完璧を期せんが爲には、平時より軍の警備を核心として全警備機關の統制ある警備計畫を樹立しなければならない。敵の空襲に對して特に其必要を認むるのである。

d 情報、宣傳

情報、宣傳戰が平戰兩時を通じて必要なるは勿論なるも、特に戰時に於ては國の內外に對し極めて重大なる影響を及ぼすを以て、全機關を統制し、一貫せる方針に基く計畫準備を必要とする。

e 戰時法令

戰時施行せらるゝ各種の運用統制策は、平時と著しく其趣を異にするから別に戰時法令を準備しなくてはならない。彼の軍需工業動員法は戰時法令の重大要素を含有せるも尙附加すべきものが少くないばかりでなく、未だ施行の體系を有して居ない。

f 總動員執行機關

資源局は戰時構成せらるべき總動員執行機關の核心たるべきものであるが、戰時之を

擴充し全國に統制ある執行機關を設立するの準備を講せねばならぬ。

四　結　言

大戰の慘禍を滿喫し、平和欲求の念に驅られたる列強も、今や再び本然の姿に歸り、各、經濟「ブロック」の孤城を擁して、果敢なる經濟戰を演じつゝ、斷然舊殼を棄てゝ一意戰爭準備に邁進しつゝある。歐米に平和なく、東洋に干戈動き、表面平靜を裝ふも波瀾は波瀾を生んで危機を孕み何時爆發するかわからない。

皇道を宣布し、東亞鎭護の守護神を以て任ずる帝國は、速に內は國力を總動員して軍に肇固なる支援を與へ、外は日滿統制經濟を强化して之を東亞の共同防衞に擴充し、以て其平和攪亂者に向ひ躊躇なく破邪顯正の天劍を加ふるの準備を完成して、明日の危機に備へなくてはならぬ、而して之が根基は人心の和である。

此精神的團結を求むる能はずして、如何に物質的要素の整備に汲々とするも、夫は龍を畫いて睛を點ぜざるの類であり、大なる價値を有しないのである。此精神的團結あり てこそ、爾他の物質的諸準備は、數倍乃至數十倍の效果を發揮し得るのである。黨爭を排し、勞資を固め、國民精神を糾合し、軍需諸品を整備して、戰爭の準備に邁進すること、眞に今日より急なるは無いのである。

時局兵備充實の急務

昭和八年十月十九日
陸軍省調査班

時局兵備改善の意義

目次

一　過去に於ける軍備と國家財政との關係……二頁
二　最近に於ける兵備の改善……一五
三　時局兵備改善の目的……二七

時局兵備充實の急務

帝國四圍の情勢と、關係列國の軍情とを觀察するに、帝國陸軍兵備の改善は實に刻下の急務である。目下陸軍の企圖しある兵備改善は此要求に應ぜんが爲にして、其眞目的は戰爭せんが爲の準備に非らずして、戰爭を未然に防止せんが爲の準備に外ならないのである。說を爲す者は、陸軍は非常時に名を藉り、財政難局を顧みず膨大なる豫算を提出し、毫も國民の負擔を念としないと非難して居るが、之に對しては吾人は陸軍豫算の內容の檢討を切望するものである。概言すれば陸軍豫算は經常豫算と滿洲事件費と作戰資材整備費との三つに分つことが出來る。而して經常豫算は今玆に論ずる迄もない。又滿洲事件費は滿洲國承認に伴ふ日滿議定書に基く當然の支出にして、純然

たる國策遂行費に屬し、之を以て軍事費となし陸軍豫算を云々するの資に供するは全然誤りである。最後に作戰資材整備費であるが、之は決して新規の要求に非ずして、既に議會の承認を經たのであるが、經濟界其他の事情に依り已むを得ず其使用を一時延期し國庫に預けて居るものである。然るに時局愈〻切迫し最早其使用延期を許さゞる事情となれるを以て、各種の場合を比較考量の上已むなく茲に敢て之を要求する所以である。

以下作戰資材の整備に就て若干說明を加へる。

一　過去に於ける軍備と國家財政との關係

歐洲大戰が世界の軍備に劃期的進步を齎したにも拘らず、我が國は遠く其圈外に立つて居た爲、列强の軍備に落伍したことは周知の事實である。然し

陸軍當局は、世界大戰以來列强軍備の進步に盲目であつたのでも無く、知りて而も怠慢であつたのでも無い。之には深い仔細がある。

抑〻日露戰役に於ける日本は、露國の復讐戰に備ふる爲、師團の增設等兵力增備に日も尙足らなかつた。歐洲大戰中露國の帝政倒るゝや、我が政治家にして「帝政露國を目標とせる我が陸軍は、今や日露戰前の十二師團に縮少するを要す」とて、所謂師團半減論を振り翳し、盛に民論を煽つた者もあつた。而し帝政露國の崩壞が、直に師團半減と云ふ樣な簡單な算術的結論を產み出だすものではない。

元來帝國傳統の國是は、開國進取以て國力の充實、國運の進展を圖り、且東洋の平和を確保して世界平和の維持に貢獻するに存し、四圍の情勢如何に變轉するも終始一貫し長へに渝るべきものではない。帝國の國防は、此國土

を防衞し、國民の生存福利を保障し、帝國傳統の國是を貫徹するに在る。而して國力の充實、國運の進展は、帝國の境遇として大陸の資源に俟つもの寔に多い。故に一朝事を鐵火の決裁に訴へざるべからざるに方りては、帝國陸軍は海軍と協同して我が領土の直接防衞に任ずると共に、帝國國民の生存福利を保障する爲、必要缺くべからざる比隣の大陸疆域を制して茲に國防圏を設定確立し、大陸よりする敵の脅威に對抗すると同時に、一面戰爭の持久に備へなければならぬ。要するに帝國の國是に變化なき以上帝國の國防方針は徴動だもしない。從て露國革命の結果其對外勢力の一時的失墜に依り我が國防方針に變化を來し、國防力を半減するが如きことは國防當局として思ひも寄らぬことである。

事實に於て革命後の露國の軍力は尚侮り難いものがあつたのみならず、其後逐次に內容の改善充實を行つて居たので、帝國は歐洲大戰直後も尚二十五師團を目標として軍備の充實に努力して來た。共後歐洲大戰の齎した、軍の科學的進歩の餘りに急なる爲量を節して質的向上の必要に迫られ、大正十二、十四年の兩度軍備整理を斷行するに至つた。然るに此間、海軍及國家財政との協調上、忍ぶ可からざるを忍びて、陸軍豫算の繰延に次ぐに削減を以てし、爲に軍備の量的削減に加ふるに、質的未改善の儘、換言すれば榮養不良の軍備を以て今次の滿洲事變を迎ふるに至つたのである。

遠き過去は措いて最近十年間の作戰資材整備關係豫算の概況を述べて、此間に於ける陸軍の苦衷を明にしよう。

作戰資材整備關係豫算は國防充備費を以て大宗とする。

此國防充備費は、大正四年以來の各種繼續費殘額と、大正九年度に於て成

立した豫算とを、大正十年度に一款に統合して命名したものである。大正十年度に於ける國防充備費(其內作戰資材關係豫算以下同じ)の總額は約五億六千萬圓で、大正十年度より大正二十四年度即ち昭和十年度に亘る十五年間の繼續費となつて居た。傳聞するところに依れば大正八年原內閣當時、海軍は八八艦隊を目標として海軍の大擴張を豫期し、陸軍も亦二十五師團を目標として相共に軍備充實の企圖を有して居たので、此陸海軍の企圖する國防費全部を平行して九年度以降の豫算に計上することは、當時異狀の好景氣に惠まれて居た時代とは云へ、頗る困難を伴つた。偶〻當時の高橋藏相と田中陸相及加藤海相會合の席上、田中陸相は一般の狀況に鑑み、繼續費取得の優先權を海軍に讓ることを決意し、試みに白紙上に矩形の圖を畫きて、之を繼續費の總額に擬し、右上より左下に對角線を引いて之を二分し、上部三角形を陸軍、下部三角形を海軍に充當し、海軍は右方三角形の底邊より左方三角形の頂點に至るが如く、其繼續豫算の年割を初めの方の年度の分を多くし、年を逐ふて遞減せしめ、陸軍は先づ最小の三角形の頂點より始め、海軍豫算等の遞減に伴ひ、年々遞增して遂に最大の底邊に達する如く國防費を兩軍に配當すべく提案した。之に對し加藤海相は欣然贊意を表し、高橋藏相も亦同意したので翌日他の閣僚にも諮り全部の同意を得て、九年度以降豫算割當を決定した由である。即ち以上の經緯で成立した豫算であるから、海軍は直に八八艦隊の編成に著手し得たが、陸軍は海軍豫算の大部が使用された後でないと多くを使へないことゝなつて居た。

當時の年度割から云へば陸軍豫算は大正十七年度(昭和三年度)より著しく增加し、大正二十二年度(昭和八年度)を以て大體の充實を完了する計畫であ

つた。所が豫算は其後繰延べに次ぐに削減を以てした結果、昭和七年度初頭迄に陸軍に於て使用した豫算は當初の豫算に對し三割弱に過ぎない。左に繰り延べ節減の主なる點に就て述べよう。

大正十二年山梨陸相の時軍備整理が行はれた。

此軍備整理は前述の如く量に代ふるに質を以てする方針の下に、兵力を減じて之を補ふに新兵器等の充實を圖ることゝし、其所要豫算約九千六百萬圓を得る爲、五師團に相當する人馬を減じて約四千百萬圓の財源を捻除し、差引約五千五百萬圓を新規に增加し裝備の改善費に充てたので、大正十二年度以降の國防充備費の總額は約五億五千萬圓となつたが、一方國家財政上の負擔輕減を圖る行政整理の意味で、其最終年度を四箇年延長して大正二十八年度(昭和十四年度)とした許りでなく、前年次の豫算を後年次に繰延べたので、

未だ充分資材の整備に著手せざる以前に、整備の進度を相當後年度に延ばした結果になつた。大正十二年關東の大震災に遇ふや、國家財政難局に處する爲大正十二、十三年度の豫算中より計千六百萬圓を後年度に繰延べ、且最終年度を大正三十年度(昭和十六年度)となすの已むなきに至つた。次で大正十四年の軍備改編の際には航空、戰車、高射砲隊の新設、新兵器の採用等の爲、十四年度乃至二十一年度の間に於て總額三千六百萬圓(內兵器費に屬するものは總額の二分の一)の軍備改編費を得たるも、所要財源の一部に充當する爲、同年以降十年間に、國防充備費一千四百萬圓の節減を行ふの外、一億一千七百萬圓を後年度に繰り延べた。

茲に於て作戰資材の整備は三度其時期を遲延するに至つた。斯くの如き經緯を經て來た豫算も、昭和二年度以降に於ては毎年財政上の考量一點張りで

削減繰り延べの行はれない年はなく、繼續費は空手形なりと云ふ觀念を生じた位である。昭和五年度豫算に於ては、五年度乃至十一年度の豫算中より總額四千百萬圓を十二年以降に繰り延べ、更に同年度實行豫算の際にも繰り延べを行ひ、越えて六年度に於ては約九百萬圓の節減と約三千萬圓の繰り延べを餘儀なくし、其一部は昭和二十六年度を終期とするに至つた。之を要するに大正九年に於て國防費配當の優先權を海軍に讓りしこと、、其後に於ける屢次の繰り延べ節減に依り、十年を經過せる八年度初頭に於てすら作戰資材の整備は當初の計畫の約三割を充たし得たに過ぎなかつた。

資材關係豫算の狀況右の如くである以上、裝備の改善充實が出來なかつたのは寧ろ理の當然と云はねばならぬ。

然らば前述既定繼續豫算の總額を全部取り得たならば、理想的軍備が出來上つたのであつたかと云ふに、決してそうではなかつたのである。大正九年陸軍部内に作戰資材整備會議と云ふものを設け、部内の專門家を集め、作戰上の要求を基礎とし、我が國工業力を調査し、戰時工業動員に依り調辨し得るものは、之が平時貯藏を避くるは勿論、效力は多少劣るも、苟くも、代用し得るものは廣く之を利用する等、有ゆる方策を考究し、前後五箇年に亘り大々的調査を行ひたる結果、前述既定、繼續豫算の總額を使用し盡すも、尚五億圓餘不足するとの結論に達した。是新資材の出現に伴ふ軍の裝備に多大の費用を要するのみならず、近代戰の特徵は資材の補給量著大となるに對し、我が工業力の貧弱、特に開戰初期、軍需工業への轉換遲々として其能力昂らざるに起因するのである。

今砲彈の一例を採りて、近代戰が如何に莫大の補給量を要するかを說明す

れば次の通りである。

年次	會戰名	國別	火砲一門の射耗砲彈數
一八六六年(普墺戰爭)	ケーニヒグレッツ會戰	墺	二六
一八七七年(普佛戰爭)	主要五會戰平均	普	六〇
明治三十七、八年	遼陽、沙河、奉天會戰平均	日露	二八二 二三〇
一九一四年(歐洲大戰)	マルヌ會戰	佛	三六〇
一九一五年	シャンパーニュ會戰	佛	二、三八〇

更に一會戰に射耗した彈藥の總數を比較すれば

區分	射耗彈數	奉天戰の日軍を一としたる比率
奉天戰の日軍	三三〇、〇〇〇	一
ベルダン戰の獨軍	二〇、〇〇〇、〇〇〇	六

ソンム戰の佛軍　三四、〇〇〇、〇〇〇　一〇〇

又兵器彈藥費を比較すれば

日露戰役間日軍の兵器彈藥費	二億圓
歐洲大戰に於ける英軍一年間の兵器彈藥費	六十五億圓

全く桁違と云ふより外はない。

扨て既定繼續豫算すら取れないのに、其上五億圓を要求しても到底問題にならぬことは明であつた。

然し此大問題を解決しなければ戰に勝てぬのだから何とか解決せねばならぬ。大正十五年陸軍省に整備局が新設せられたのも此爲であつた。斯くて陸軍は一方國家總動員の促進と相俟ちて軍需工業動員の進歩を計り、以て戰時調達能力の向上を策すると共に、平時整備したる資材は徹底的に重點主義を

採ることゝした。重點主義とは何んなことかと云へば、特に重要な方面に向ふ部隊の外は出來るだけ舊式兵器で我慢し、其數も亦節する外、例へば毛皮の防寒被服の足らぬ分は毛布製の代用品で我慢し、列強の軍隊が持つて居る炊事車（行軍中に炊事を終り軍隊が宿營又は戰鬪配備に就くと同時に溫食を給するもの）の如きは造らずに、凍つた梅干飯や干麵麭で我慢しようと云つた様な方法である。

斯様な苦心を重ねても何しろ既定繼續豫算の三割しか費へなかつた。陸軍は滿洲事變前には何んと云つても榮養不良の裝備であつたことは免れぬ。

斯かる陸軍の苦衷は國民には理解されて居なかつた。軍事費の削減は議會と云はず言論機關と云はず、時と所とを選ばず叫ばれた。然し前述した所で明な如く、陸軍は國家財政と海軍軍備との協調の爲、既定繼續豫算すら最近迄其七割を讓つて來た忍從は是非諒解せられなくてはならぬ。

世間では陸軍が非常時に名を藉り、新に大きな豫算を取らんとして居るやうに考へて居る者もないではないが、是は大なる誤解である。最近陸軍が要求する資材整備費は既述の如く議會が既に協贊したものであるが、經濟界其他の事情で已むを得ず、其使用を一時中止して國庫に預けて置いたものを、國防の危機が近づき最早一刻の猶豫を許さない狀態に立ち到つたので、已むを得ずそれを返して貰ふに過ぎないことを明瞭に了解せられたい。

二　最近に於ける兵備の改善

世界大戰間、參戰各國軍の裝備が一大躍進を遂げたことは勿論、大戰後と雖歐米の諸列强は大戰間の苦杯を嘗めた體驗に基き、財政不如意の折柄にも拘

はらず、孜々營々として新兵器の發明に整備に努力して居る。最近に於ける歐米列強陸軍裝備の趨勢は火力の增進、軍の機械化、空軍勢力の擴大と防空竝化學戰準備と之が對策とに重點を向け、主兵器威力の增補強化を圖る爲に光學的、電氣的、精密機械的の智能兵器を以てするを一般とする。例へば輕、重機關銃又は機關砲、各種步兵砲、擲彈筒、大、中口徑火砲特に重砲等の威力を增大すると共に其數を增加し、戰車、裝甲自動車、自動車牽引砲等を在來の部隊に配屬して其機動力を增進し、或は英、米、蘇軍に見るが如く裝甲移動兵器や特種自動車のみを以て一部隊を編成し、裝甲に依りて火力の損害を減少し、近接戰鬪の攻擊威力を增强する機械化兵團の編成の如き、或は又、飛行機の威力竝其數を增加して空中威力を向上すると共に、之が對應策として戰場は勿論、國內主要都市等の防空施設を行ひ、海牙條約に就て禁止せられある

化學戰に就ても、敵が使用したる場合の對抗手段として依然各國共多額の費用を投じて防護手段は勿論、攻擊資材迄も研究演練しつゝあるの實情である。殊に蘇國に於ては化學戰部隊なる獨立部隊を有するのみならず、步兵聯隊內や騎兵師團にも化學小隊を附屬して居る。又民間に於ても國防飛行化學協會が設立され、產業五年計畫後は毒瓦斯防護關係者千七百萬人を包容せんと企圖し、現在婦人會員でさへ百十萬を算し、發會時は防空防毒を主として居つたが、最近では原料の研究、化學工業品製造所の設置等積極的に活動を始めた。以上の如く列强陸軍の裝備は世界大戰後益〻之が改善充實に努力されつゝありて、其裝備の發達は實に驚嘆に値するものがある。左に列强陸軍野戰師團の裝備と主要兵器數に就て比較して見よう。

列強陸軍野戰師團裝備比較表

區分	日	蘇	米	英	佛
輕機關銃	約三〇〇	(共騎兵)一六八	(自動小銃)約一、〇〇〇	(騎、砲、工兵共)三一八	三三四
重機關銃	約五〇	一六三	約三五〇	(騎兵共)二〇四	
平射步兵砲	約一〇	九	四二	? 九	
曲射步兵砲	約一五	九	三二	(高射騎兵共)二八	
野砲	約三五	三六 (內聯隊砲一八)	四八	對戰車機關銃 五三	一四四
野戰重砲	—	一二	二四	(騎兵共)	
飛行機	—	—	一三	—	—
輕戰車	—	—	二四	—	—

右表の內師團內の步兵聯隊數は日本軍及米軍に在つては四、蘇軍及佛軍に在つては三であつて、英軍師團に在つては其步兵は聯隊に區分することなく三旅團、十二大隊である。從て主要兵器の步兵一中隊當りの比率は蘇、佛軍にありては右表に記載せし日軍のものに比し著しく優越なものである。例へば日軍は中隊當り輕機關銃約六、重機關銃約一、火砲〇・七であるが、蘇軍は輕機關銃約六、重機關銃六、火砲一・八の比率を示して居る。而かも右表に記載せる蘇軍は平時編制である。又右表の外各國軍共に師團の外に強大なる重砲、機械化兵團、化學戰部隊、航空部隊を有すること確實であるが、夫等の師團に對する割當數は不詳である。

列強主要兵器數比較表

國名	飛行機	高射砲	戰車	裝甲自動車
日	約六〇〇 外に直接補塡用 約二〇〇	約一五〇	約一五〇	若干
蘇	約二、二〇〇 （外に約一割の海軍機あり）	不詳	約一、六〇〇	多數
米	約一、八〇〇	約二〇〇	五〇〇	約二〇〇
英	約一、五〇〇	正規軍四八 其他不詳	約二二〇	約二〇〇
佛	約三、〇〇〇	約一六〇	約一、五〇〇	多數
伊	約一、五〇〇	約一四〇	約一二〇	約五〇

（備考）一、日、米は陸軍飛行機を英、伊は空軍省飛行機を、佛は航空省飛行機數を示す。

二　本表の外英國に於ては歩騎兵用輕戰車數百輛を、佛國に於ては多數の豫備戰車を有す。

上述の通り歐米諸列強の裝備と我が陸軍の裝備とを比較して見ると、我が國は一等國陸軍としては既に落伍者の觀がある。往年大演習の際參加した某外國武官は鐵帽も被らず機關銃も少き日本軍の狀態を見て、指揮官の戰術能力や、將兵の戰鬪力は驚嘆に値するも、斯くの如く裝備劣弱では將來戰に際し、果して日露戰爭時代の如き勝利を得ることが出來るだらうかと側近者に漏した相であるが、中らずと雖遠からざる感がないでもない、少くとも頂門の一針たるを失はない。陸軍としては、從來と雖裝備の改善には大に努力して來た。併しながら由來劃期的裝備の改善には巨億の國幣を要する關係上、平常時之が急施は頗る難事であつて、歐洲諸列強が大戰時巨億の費用を投じ

て基礎を確實にし、之に逐年改善を加へて來たのに對し、我が國では大戰に參加したとは云へ東亞の一隅に居り戰爭の本舞臺に立たなかつた關係上、其進歩が遲れたのも一因であらう。且又、既述の如く折角大正九年度に於て成立した國防費も、二回の軍備整理による整備完了年度の延長や、其後に於ける繰延べ削減の當然の結果に外ならぬ。吾人は過去に於ける軍備整理の可否を申すものではない。只だ、資材整備の一局面の結果を紹介した迄である。斯かる情勢に於て我が陸軍は榮養不良の儘で何時迄も安閑として居られるものでない。何としても或程度の裝備改善を斷行しようとして、昭和四年軍制調査會を設け軍制改革に著手し昭和六年一成案を得た。此軍制改革案は陸軍の有する豫算の範圍内に於て彼此整理按配せんとしたもので、之が爲特に新なる改善の資を國庫に仰がないことにしたので、改善完成の目標を數年後に

期待しなければならず、即ち一部縮少に代ふべき新施設は直に之を充實するを得ず、一時戰力を低下するの虞があり、加ふるに軍の編成、團結及師管等に相當大なる變革動搖を與へなければならぬ不利があつたが、今や内外の時局は滿洲事變の發生に伴ひ急轉回し、所謂非常時の狀態に推移し來つたので、軍戰力の某時期間低下竝編成、團結、及師管等の動搖は極力之を避けねばならず、而も一方に於ては此時局に善處して皇威の發揚、國防の完備に遺憾無きを期すると共に、日滿議定書の示す所に基き滿洲國内の治安維持に任ぜざる可らざるに到り、軍の裝備も亦到底現狀を以て滿足する能はず、少くも所謂落伍狀態に停るを許さず、之が改善の必要は、軍制改革を企圖した當時に比し一層急なるものがある。これ今回時局兵備改善案の生じたる所以にして、財政急迫の今日にも拘らず巨額の支出を國庫に仰ぐ所以である。時局

兵備改善案の内容は之を大別すれば左の四項目である。

(一) 在滿兵力の充實
(二) 補備教育の充實
(三) 緊急を要する諸制度の改善
(四) 作戰資材の整備

右の內作戰資材の整備に就て若干の說明を試みよう。

本案に依る作戰資材の整備に依り國軍裝備の一半を現代型に、他の一半を大戰型に近からしめんとするもので、之が爲兵器、被服、糧秣、衞生材料、獸醫材料の各般に亘り、特に其重點を重機關銃、步兵砲、擲彈筒、輕榴彈砲、重砲、高射砲等の火器及同彈藥、飛行機、戰車、自動車等の新式資材、瓦斯防護器材等の兵器に置くものであつて、此等資材は時局に鑑み緊急已むを得ざるもの、みなるにも拘らず、之が整備に總額約五億五千萬圓を要し、昭和八年度以降の既定繼續豫算全額三億五千萬圓を投じて尙二億圓の不足を生ずるのである。そこで陸軍の現在の計畫では國家財政の現況に鑑み、先づ既定繼續豫算三億五千萬圓の內約一億六百萬圓を、昭和八年度豫算として第六十四議會に於て協賛を受け、殘餘の大部は昭和九年度に、僅少の一部を昭和十年度に整備を行ひ、不足額二億圓の新規要求は最近に於て適當の時期に提案する希望である。

而して時局兵備改善案と雖未だ世界の最優良裝備を眞似んとするものに非ずして、既述の重點主義を徹底するは勿論、作戰上の要求を最少限度に充たすことを目途として國家財力を顧慮し、眞に必要の最小限度に甘んぜんとするものである。更に又最近に於ける軍事科學の進步は資材整備の爲、一層多額

ならない。然し世界が天國でない限り軍備を以て平和を保證しなければならぬ現世に於ては、軍備の均勢を失せんかそれこそ戰爭を誘發するの恐あることは過去の歷史が之を證明して居る。未曾有の經濟的難境に作戰資材整備關係豫算のみにても數億と云ふ多額の經費を要求するのは、情け無きの仕業に見えるかも知れぬが、若し一度開戰に至らんか、數十億圓を要するであらう。之に加ふるに數十萬の生靈を犧牲としなければならぬことを考へるならば、十年以來延々になつて居た既定繼續豫算の拂戻は勿論、少くも時局兵備改善案を速に完成することは、軍民共に所謂非常時の覺悟を以て是非とも斷行せねばならぬことである。次に此時局兵備改善案完成の時期に就て說明を試みよう。

帝國四隣の情勢よりすれば、之が完成の時期は一日を爭はねばならぬことは勿論である。而し一方國家財政の關係も顧慮しなければならぬから、國防上忍び得る最大限に之が完成の時期を選定せねばならぬ。

一九三六年(昭和十一年)前後が、國防上重大なる危機であることは今更多くの說明を要しない。此危機迄に時局兵備改善案の全部を完成するは誠に望む所なるも、之が爲には前記の如く五億五千萬圓より昭和八年度の豫算約一億圓を控除した殘約四億五千萬圓を、昭和九、十年度に整備することゝなる。是到底國家財政の許さゞる所であらうから、少くも重要兵團の主要資材を整備する事に止めなければならぬのは誠に已むを得ざる所である。

而して資材は單に之を整備したゞけで滿足すべきものでなく、之が教育訓練を完成して始めて其效用を發揮するのである。新資材に於て特に然りである。重要なる新資材の教育訓練の徹底は短時日の許す所でないが、今假りに

の經費を要する。例へば野砲一門は舊式四千圓のところ新式のものは二萬圓にも上り、偵察飛行機一臺舊式二萬五千圓位のものが新式では七萬圓を要し、重爆撃飛行機一臺舊式七萬七千圓に對し新式では二十萬圓にも達するに至つた、又砲彈にしても大口徑火砲の彈丸一發の値段が一千圓すると云つて驚いたのは昔のことで、今日は築城や兵器の裝甲が進歩した爲一發數千圓するものも必要となつた。加之、昔は砲彈の如き僅に榴彈、榴霰彈の二種で事足れりとしてゐたのが、今日は長射程砲用の尖鋭彈や、特殊用途の發煙彈や、燒夷彈、鐵甲彈等を持たねばならぬ。歩兵の個人裝備としても鐵帽や防毒面が必要であり、被服、衞生材料としても毒瓦斯の現出と共に其防護又は治療用資材を要する等、資材整備の經費は益〻增加するからである。

三　時局兵備改善の目的

過去に於ける軍備の狀況と最近の兵備改善の梗概は、前述した所で大體明になつたことゝ思ふ。次に起る問題は時局兵備改善の目的如何である。答は極めて簡單で「極東に迫つて來る戰爭を避けんが爲」である。

兵備の改善とか軍備の充實とか云へば、世人は動〻もすれば戰爭をやるのだと考へ易いが決してそうではない。軍備の目的は常に不變の原則たる平和の保險であらねばならぬ。

特に滿洲國の產婆役を勤め其健全なる發達を保護し、帝國前途の行き詰りを打開し東洋の平和を確保するは、帝國の尊い使命である。此重大なる使命を果さぬ內、徒に血氣の勇に驅られて戰爭を好むが如きことは斷じてあつては

ならない。然し世界が天國でない限り軍備を以て平和を保證しなければならぬ現世に於ては、軍備の均勢を失せんかそれこそ戰爭を誘發するの恐あることは過去の歷史が之を證明して居る。未曾有の經濟的難境に作戰資材整備關係豫算のみにても數億と云ふ多額の經費を要求するのは、情け無きの仕業に見えるかも知れぬが、若し一度開戰に至らんか、數十億圓を要するであらう。之に加ふるに數十萬の生靈を犧牲としなければならぬことを考へるならば、十年以來延々になつて居た既定繼續豫算の拂戻は勿論、少くも時局兵備改善案を速に完成することは、軍民共に所謂非常時の覺悟を以て是非とも斷行せねばならぬことである。次に此時局兵備改善案完成の時期に就て說明を試みよう。

帝國四隣の情勢よりすれば、之が完成の時期は一日を爭はねばならぬことは勿論である。而し一方國家財政の關係も顧慮しなければならぬから、國防上忍び得る最大限に之が完成の時期を選定せねばならぬ。

一九三六年(昭和十一年)前後が、國防上重大なる危機であることは今更多くの說明を要しない。此危機迄に時局兵備改善案の全部を完成するは誠に望む所なるも、之が爲には前記の如く五億五千萬圓より昭和八年度の豫算約一億圓を控除した殘約四億五千萬圓を、昭和九、十年度に整備することゝなる。是到底國家財政の許さゞる所であらうから、少くも重要兵團の主要資材を整備する事に止めなければならぬのは誠に已むを得ざる所である。

而して資材は單に之を整備したゞけで滿足すべきものでなく、之が教育訓練を完成して始めて其效用を發揮するのである。新資材に於て特に然りである。重要なる新資材の教育訓練の徹底は短時日の許す所でないが、今假りに

現役兵のみに徹底さすことを以て滿足するものと假定すれば一年を要する。此最少限の教育期間を見込むと前述の重要なる兵團の主要資材の大部は昭和九年度に、殘餘は遲くも昭和十年度に完成しなければならぬことゝなる。此意味に於て昭和九年度は資材整備上實に重大な意義を有することを忘れてはならぬ。

斯くて昭和十年度以降成る可く速に時局兵備改善案の完成を計ると共に日進月歩の軍の科學的進歩に追隨する段取となるのである。

空の國防

昭和九年三月三十日
陸軍省軍事調査部

目次

驚くべき航空の發達……一
空中武力發展の歴史的經過の概要……三
將來に於ける航空發達の動向……七
列國空中武力の現勢……八
蘇聯邦空中武力の躍進其他と我が空中國防の脅威……一一
民用航空……二〇
大都市に對する空爆の威力……三〇
「空中戰一九三六年」其他……三三
攻撃せざる者は撲滅せらる……三七

空の國防

驚くべき航空の發達

航空最近の發達は誠に驚くべき狀態で、其の異常の發達は之れが運用にも一大變革を持ち來たした。

曩に一九三一年十四機編隊を以て、アフリカのボラマ——ブラジルのナタール間南大西洋橫斷飛行を敢行した伊太利空軍は、昨一九三三年六月、バルボ空相直接指揮の下に、サボイヤS五五號飛行艇二十四機の編隊を以て、イタリーのオルベテロ——米國のシカゴ間北大西洋の橫斷飛行に成功し、航空史上に劃期的大記錄を樹立した。今や航空機は陸上海面何れにも離著して、至短時間に遠く大距離を翔破し、立體的に活動し、最も機動に富む强大なる攻勢的武力となつた。

民間航空の發達も亦驚くべき勢であり、各種のレコードは急速に其の飛躍を見せ、巨

大有力なる新型機は、續々と考案建造せられ、是等は何れも、一朝有事の際、直ちに軍用に轉用せられる關係に在る。例へばソウイエトロシヤのA・N・T九型、K五型、A・N・T一四型等皆然りであるが、ソウイエト、ブリヤト紙の報ずる所によれば、ソウイエトロシヤが最近建造に著手した所の巨大飛行機マキシム・ゴリキー號の如きは、

發動機、六個　　總計　六、〇〇〇—七、〇〇〇馬力
燃料搭載量　　二、〇〇〇籾分（無著陸）
最大速度　　二二〇—二四〇籾
乘客　　七〇名
裝備　1　無電裝置
　　2　ラジオ放送
　　3　テレビジョン
　　4　寫眞機及活動寫眞

　　5　印刷機

の諸元性能を有して居る。之を彼の一九〇三年米國ライト兄弟が石油エンジン取付のライト式複葉機を創作し、始めて空中に舞ひ上り十二秒間に二百三十六米六〇を飛行した當時に比べると、誠に隔世の感がある。

空中武力發展の歷史的經過の概要

第一期（研究時代）

一九〇三年から一九一三年に至る十一年間は研究時代であつた。即ち飛行機の發明に引續き、各國共專ら之れが設計、試驗、研究に沒頭し、大戰勃發までに其の性能に多少の向上を來たし、英獨佛等に極めて少數の航空部隊を創設したが、軍事上各種の裝備に至つては全然見るべきものがなかつた。

第二期（大戰間の發達時代）

一九一四年—一九一八年の五ヶ年間は第一期に於て研究を遂げた飛行機の軍用化時代

で、大戰間逐次各種飛行機が出現し、其の質の優劣、量の多寡が、直ちに戰鬪の勝敗に大きな影響を及ぼすに至つた。之れが爲め、各國は競ふて其の質の向上を圖り、且つ成し得る限り多量を製作し、これが活用を努めた。其の結果世界大戰は端なくも飛行機の實用時代を生んだのである。

第三期（停頓時代）

一九一九年―一九二二年の四ヶ年間は一時停頓時代を形成した。即ち大戰に依る各國財政の創痍は已むなく空軍を縮少整理せざるべからざるに立ち至つて、部隊の減少、人員器材の整理を斷行した。併しながら各國は大戰中に味つた空中威力に將來を期待し、窃に其の技術的研究を續行奬勵する一方、人員器材を民間航空に轉用消化することに力めた結果、民間航空の發達を直接間接に促して來た。

第四期（整備時代）

一九二三年以降は正に整備時代と云ふべく、即ち佛國が對獨對英政策の爲め一九二二年急遽巨大の航空擴充案を決定し一九二五年までに完成すべく蹶起し、更に一九二八年には遂に空軍を獨立し航空省を創設した。英國は大戰後即ち一九一七年に早くも空軍省を設置し國防の將來を畫策したが佛國の擴充案に刺戟せられ第一次第二次と連續的に擴張計畫を樹てゝこれに對抗し、伊國亦一九二二年ムッソリニーが政權を握るや航空豫算に二億八千萬リラを計上し、次で一九二五年大改革を斷行して空軍省を設け、大空軍建設の步を進め出した。

獨逸　は戰後條約の制限より軍事航空を全廢するの已むなきに立ち至つたが、鋭意これを排して航空工業の回復發達に志し、極度に民間航空を發達させ、又、條約に牴觸せざる範圍に於て軍部としての準備に遺憾なきを期して居るのみならず、昨一九三三年には遂に航空獨立の基礎たる獨逸聯邦航空長官の任命を見るに至つた。

米國　も亦一九二三年以來、擴張に擴張を以てし、所謂世界第一の意氣を以て航空威力の大成を企圖して居ることは周知の事實である。又、西隣**支那**は、數年前から列强

の援助を得て航空の發展を企圖して居つたが、滿洲事變及上海事件特に熱河作戰に苦杯を嘗めた結果、航空救國を高唱するに至り、歐米列强特に米國の指導の下に空軍三年計畫を樹て、著々これが整備に努め、福州爆擊で一擧反對政府を覆へした。之れによつて南京政府は空軍の威力に隨喜して益、其の充實に拍車を加へた觀がある。茲に於てか、東亞を目がけて航空勢力の進入を狙つて居た列强は好機逸すべからずとなし、人員器材の提供に、將た又、利權の獲得に、一大暗躍を演じて居る。

吾人の特に關心を持たなければならぬことは蘇聯邦（ソウイエトロシヤ）が恐るべき空軍の大擴張を爲しつつあることで、是に關しては更に項を更めて記述するが、蘇邦は一九一八年國內戰終熄するや「萬事を措いて空へ!!」の標語の下に官民擧つて航空に熱中し、一九二二年約二十中隊であつた陸軍航空隊は一九二八年には百四中隊に飛躍し、最近更に第二次五ヶ年計畫によつて大空軍の建設に鋭意努力中であつて本一九三四年初頭に於ては二百四十二中隊、飛行機數三千機以上、外に氣球十三中隊、航空船二中隊の大陣容を示し、其の徹底せる經濟的努力に基く飛躍振りには、我が國などの到底追隨を許さぬ强味があり、今後に於ける蘇邦空軍の擴張飛躍は、全く測り知るべからざるものがある。

以上の如く各國は航空國防の急を痛感して著々之れが整備に驀進して居るが、飜つて我が國航空の經過を觀るに、第一期の研究時代は列强に比し必ずしも大なる立ち遲れはして居なかつたが、第二期に於ては世界大戰の直接の刺戟を受けなかつた爲め甚だしく航空威力充實に於て立ち遲れ、第三期になつて漸く覺醒して列强に追及しやうと努めたのであるが、列國が第四期に至つて一大躍進を始めた爲め、再び大なる懸隔を來たし、容易に追隨し得ない狀勢にある。殊に空中武力の第二線とも云ふべき民間航空に於ては、列强に比べて甚しく遜色がある。

將來に於ける航空發達の動向

今後に於ける航空發達の動向を豫想するに、恐らく航空は今後愈、急速に加速度的に

發展し、飛行機工業の發達と對敵動作の要求とからして、飛行機の大いさ、速度、上昇高度、航續力、搭載力等益、急速に增加發達し、巨大飛行機の大編隊を以てする空中艦隊の聯想も、決して夢物語でない時代が近き將來に實現するであらう。かくして、風雲急にして將に國交斷絕せんとするや、或は又、國交斷絕と同時に、空中大艦隊を以てする敵國主要都市の大空襲と云ふが如き、小說的將來戰が、夢の如く展開せぬものと、何人が斷定を下し得るだらうか。即ち、開戰劈頭、强大なる空中威力を以て敵國の軍事、經濟の根據地を急襲し、其の國力の中樞を擊滅して、勝敗を一擧に決しやうとする思想が、列强の間に瀰漫して來た。而して、列强の空中威力の擴充にも、現實にかゝる動向が著しくなつて來たのである。乃ち、今後に於ける航空發達の經過は、優秀飛行機、殊に巨大機の大編隊を以てする跳梁飛躍時代として、第五期を劃するのではあるまいか。

列國空中武力の現勢

世界列强の現有する空中武力は駸々乎として日進月步の狀態に在るを以て、其の機種性能等何れも昨日の覇者必ずしも今日の王たらざることを顧慮しなければならぬ。本年初頭に於ける列國陸軍航空武力の保有數量を列擧すれば第一表の通であつて、日本は列强に比して尙は甚しく遜色がある。

第一表

列國陸軍航空及防空兵力表

（昭和九年一月現在）

國名	陸軍所屬飛行機數	高射砲
日本	昭和八年一月　約八〇〇機 目下若干增加中	一聯隊と一隊
ソロヴィエト	三、〇〇〇機以上	旅團　約三個 獨立聯隊　約五個 獨立大隊　一六個

米國	二、〇五〇機		
英國	約 九三〇機 （外に補充用一六〇〇機） （陸軍に配當せらるべき線列機のみとす）	計 二、五三〇機	砲數 不詳 地方軍防空旅團 三個 正規軍高射砲二大隊（六中隊）四八門 七聯隊 二〇〇門 外に高射機關銃 約五、〇〇〇 （本數字は豫備兵器を含む）
佛國	約 三、〇〇〇機 （戰時は裕に五、〇〇〇機）	砲數 四聯隊（三二中隊）と三隊一六〇門	野戰高射砲聯隊 五 義勇軍に屬する陣地高射砲司令部 二五 砲數 約 一四〇門
伊國	約 一、五〇〇機		
獨逸	平和條約の制限により航空兵力なし		
ベルギー	三〇〇機	?	

ユーゴースラブ	三六〇機	?						
オランダ	二〇五機	?						
ポーランド	約 一、〇〇〇機	?						
ルーマニア	三五〇機	?						
イスパニヤ	五〇〇機	?						
チエック	八五〇機	?						
トルコ	三七〇機	?						
支那	二五〇機	?						

蘇聯邦空中武力の躍進其他と我が空中國防の脅威

ソヴイエトロシヤの空中武力の大建設については、既に前々項に於て大要を述べたのであるが、實際、ロシヤの空軍大充實は最近、我が國の國防上一大脅威となつて來た。

ロシャの第二次五年計畫による航空武力の擴充振りは誠に驚嘆に價するものがあり、殊に其の兵力は日と共に增大して、急速なる統計上の躍進を見せつゝ、誠に三日見ぬ間の雨後の筍の如く、ぐん〳〵と伸びて行く。最近に於てはハバロフスクにも飛行機製作工場を新設して、大に擴張を急がうとして居るそうである。其の勢の趣く所、我が國の兵力との懸隔は日に月に增大するばかりであつて、吾々はそこに、徹底せる國家統制計畫經濟の國防上に於ける恐るべき力と云ふものを、如實に見せつけられずには居られない。

即ち最近一兩年の間に於けるロシャと我が國との陸軍飛行機の增加の數字を比較すると概ね次の通りである。

年次	ソヴエイトロシヤ	日本
昭和六年一月	約一、五〇〇	約六〇〇
昭和七年一月	約一、六〇〇	約八〇〇
昭和八年一月	約二、二〇〇	約八〇〇
昭和八年十月	約二、五〇〇	
昭和九年一月	約三、〇〇〇以上	前年度より僅かに增加中

因みに昨年七月佛國ルピユ・デ・フォルス・アエリエンヌ誌の報ずる所によると、ロシャは一九三五年に於て五箇年計畫の努力により其の軍用飛行機總數五千を算し、之を六十二箇聯隊に支給する筈であるとのことである。

斯くの如き關係であるから、佛國航空大臣はロシャ訪問後「蘇國空軍は近く世界第一となるべし」と驚嘆し、又、列强の軍事通は現下に於ける日露の國際關係に鑑み、萬一日露開戰の場合に於ては、ロシャ側は甚しく有利の地位に立つて日本と空中戰を交へ得ることを一齊に力說して居る。例へば昨年十一月二十二日號の獨逸國防雜誌所載ワグネ

ル氏所論の一節を紹介すれば

「蘇聯邦の空軍を日本のそれに比すれば、數に於て蘇軍の方が優勢であると云ふことが、直ちにわかるのである。即ち蘇軍は目下――確認し得べき範圍に於て――陸上機二二〇〇（註、ワグネル氏の掲げる此の數字は昨年初頭のもので、最近は三、〇〇〇以上である）。水上機一六七を有するに對し、日本は陸上機約九五〇乃至一、〇〇〇、水上機及海岸防禦用飛行機八〇一を有して居る。日本の水上及海岸防禦用飛行機は滿洲の戰場に對して無制限に用ひ得べきものとは思はれない。又更に多數の飛行機を本國及艦隊に豫備として控置しなければならない。これが爲め戰時に於て六、七百以上の飛行機を滿洲に送ることは出來ない。云々

然るに本年一月三十一日號同國防雜誌は

「クズネッツ、マグニトゴルスク、或はヨーロッパロシャの工業地帶を空襲する爲めには、日本側は數千吉米を翔破しなければならぬ。此の遠大なる距離の關係と且つ此

の際ロシャ側が各地點で加へる有效なる防衞とによつて、日本側の空中攻撃の成功は甚だ疑はしい。

之に反して、日本に對するロシャ側の空中爆撃は全く異つた關係に在る。即ち東京、大阪、横濱、神戸等の大都市は互に近く相接近し、之に對してロシャ側は、例へばウラジオストックから、六乃至七時間を以て有效に爆撃を加へ得る。殊に日本の大都市の建物は空爆と火災に對しては全く無抵抗である

と述べて居る。

それかあらぬか、最近ロシャの當局は、我が國に對して甚しく積極的氣勢を示し、ロシャ極東司令官ブリユッヘルの如きは「三噸の爆彈量を以てすれば、全東京を大震災と同等程度に潰滅せしむることが出來る」と豪語して居る有樣である。

現在北滿國境を包んで、ロシャが極東に集中して居る飛行機數は大約四百機と見られて居るが、其の中沿海州には、新式超重爆撃機が數十臺集中されて居る模樣で、其の搭

載重量は三噸乃至五噸、航續距離は二、〇〇〇乃至二、五〇〇粁である。假りにウラジオ附近を根據とするものとすれば、東京、大阪、名古屋、關門海峽は何れも一、一〇〇粁内外であるから、日本の中樞部は、獨紙の評する如く、悉く恐るべき空襲の圏内にさらされて居る。

昨年十月十二日、東日紙の報ずる所によるも、ソヴイエトロシヤは以上の外、最新の精鋭機約百五十機をモスクワ附近に集結して有事の際には僅かに兩三日を以て極東第一線に就かしむる準備を整へて居ると稱して居る、又、滿洲國を包圍する飛行根據地は十箇所で更に是等を中心として約二十箇所の前進飛行場を完備して居り、尚ほ此の外、外蒙古庫倫にも民間飛行場に假裝せる根據地を用意して飛行機十數機を常備して居る由である。

更に又、フイリッピン又は南支那の一角等を根據として日本に爆撃を試みる者がある場合に於ても、日本の國土は全く空中爆撃の圏内に在るのであつて、其の地理的關係は

附圖第一の通りである。

因みにフイリッピンに現在する米國航空兵力は平時飛行機三中隊、地方警備一中隊で相當多數の飛行機を保有するものと見られて居る。又、支那楊子江沿岸地帶及上海―北平、上海―香港―マニラ―桑港等、中國航空公司を通じて、米國勢力の支配下に立つ民間航空施設が完成せられやうとして居る。是等は一朝有事の日、日本に對する空中威力の基礎を成すものであることは申す迄もない。

其の他、日本の北邊に對しては、北米よりアラスカの南端をよぎり、アリユウシヤン群島の上空をかすめて、カムチヤッカに至る空路の實現は、將來我が國の空の國防上決して等閑に附し得ざる重要性を持つであらう。此の航路は嘗て一九三一年十月バングボーン、ハーンドン兩氏が、世界早廻機を臨時改造したる横斷機「ミス・ヴイードル」を以て太平洋處女空横斷に成功した航路であつて、當時兩氏は、十月四日午前七時一分青森縣淋代發、同六日午前〇時一分(日本時間)北米シヤトル東方約百五十粁ウエナッチ飛行場

に現はれ、同〇時十一分無事著陸して居る。所要時間四十一時間である。

將來航空器材の進歩發達は此の航路の軍事的利用價値を益々增大するものと思はなくてはならぬ。單に飛行機夫れ自體の進歩發達の外に、例へば獨逸ウエーゼル造船工場に於ては、昨年太平洋横斷航空路用浮島を建造した。是れはウエストファリーと云ふ汽船を改造し大西洋上に繫留して飛行機の發著及燃料補給を營ましめるものであるが、浮島の研究問題は今や小說的夢想を離れて眞摯なる現實問題となつた。況んやアラスカ、アリユウシヤン群島等を利用すれば此の航路は必ずしも浮島の應用を必要とせぬであらう。我が國に對する太平洋上よりする空中爆擊の危險は、當單に航空母艦のみに依つて來ると は限らないのである。アメリカ陸軍航空司令官ベンヂヤミン・フオウロイス少將は、昨年三月三十一日、米下院陸軍委員會の說明中、アメリカ國防體系の建て直しを强調し、戰鬪艦の建造を中止して空軍の充實を計るべきことを主張し「余がかく云ふのは過去三百年間に亙る公海戰史の研究に基いてゐる。過去に於ては海上からの攻擊に對して海

岸線を防衞すれば足りたが、現在では空からの攻擊に對して內地を防衞することが必要となつた」と述べて居る。大西、太平兩洋を以て遠く歐洲或は極東と隔てゝゐるアメリカの空の國防が爾かく緊切となつたと云ふことは、同時に又、歐洲や極東が、大西洋や太平洋の存在するによつて空の國防を等閑に附し得るものでないことを意味するものでなくてはならぬ。

又、米國前航空兵團次長、國防省顧問ミッチエル少將は昨年三月三十日の軍事委員會に於て、陸海軍飛行機を統一して大空軍を建設し、三十億弗を投じて二千臺の大飛行機と、五百萬弗を費して五十臺の飛行船とを建造するの必要を高唱したる後

「吾人はアラスカに根據地を置く事が出來る。此の空軍さへあれば、日本の如きを占領するは易々たるもので、余は二週間にして、日本の經濟封鎖を完行し得ることを斷言する。何となれば、空軍の前に艦船の存在は許されないからである。」

と述べて居る。

然るに本年一月米國陸軍省は陸軍飛行隊の大擴張案を新聞紙上に發表し、參謀總長マク・アーサー大將は該案を下院陸軍委員會に於て說明した。下院陸軍委員長マク・スウエインは右參謀本部案を直ちに議案として議會に提出した。此の議案に依れば第二次五年計畫として二千機の增加を許容し、尙は豫備機として二十五パーセントを加へ、結局第二次五年計畫の終りに於て陸軍機四千七百五十機を保有せんとするものであつて、其の主旨とする所は、總司令部飛行隊と稱する一大獨立飛行集團を完成し、戰略的目標に對し使用せんとするにある。

民用航空

民用航空についても、日本は尙は列强に比して、頗る立遲れて居る。今、列强民用航空の梗概を記せば次の通りである。

日本

我が國の民用航空は近時漸く其の緒につき、特に政府補助の下に設立した日本航空輸送會社は東京—大阪—福岡—京城—大連間に航空路を開設し、旅客、郵便物及貨物の定期空輸を實施して居る。尙は一昨年九月には日滿合辨の滿洲航空株式會社が新設せられ、新義州、奉天、新京、ハルピン、チチハル等主要都市間に三、一六〇粁に亙る航路の營業が實施されて居るが、列强に及ばざること尙は甚だ遠い。

蘇聯邦

從來民間航空全聯合統一部と稱した民間航空中央統轄機關は一九三二年民間航空本部と改稱せられ、長官は、赤軍高級幹部を以て之に充て、民用航空の實質を政治的國防的要求に合致させて居る。

民用機の數は明確でないが、少くも現在五百機以上であり、A、N、T、9型、K5型等優秀巨大機や高速度機等を續々と整備中で是等は有事の日直ちに軍用に供し得る如く準備せられて居る。

一九三二年度に於ける統計は

航空路延長	三〇、五一七粁
飛行距離	七、〇〇〇、〇〇〇粁
輸送旅客	三二、六〇〇人
同　郵便物	四五三噸
同　貨　物	五五一・五噸

であつて、實に世界第二位を占めて居る。

第二次五年計畫により更に之を擴張中であつて、右計畫は一九三七年に於て

航空路延長	三〇〇、〇〇〇粁
輸送旅客	六〇、〇〇〇、〇〇〇人
同　貨　物	二、三〇〇、〇〇〇噸
同　郵便物	六〇〇、〇〇〇噸

に向上しやうとするものである。

航空事業中特記すべきことは、國防飛行化學協會（オソアウイヤヒム）であつて、其の會員數約千百萬人、半強制的に此の協會が民間資金を集めて赤空軍に獻納した飛行機數は約四百臺に達して居り、又民間飛行學校數は約二十四校である。

日本國民愛國の意氣が約百二十臺の獻納飛行機を生んだことは誠に悦ばしき事實ではあるが、之を彼のロシヤ國民が窮乏に堪へ困苦と戰ひつゝ其の計畫的努力を進めつゝ、而も尙ほ約四百臺の飛行機獻納を爲しあるのに比べるときは、必ずしも之を以て我が空の國防を安心するわけには行かない。

中華民國

支那に於ける民用航空は左の二會社によつて支配されて居る。

一　中國航空公司

米支合辦であつたが、今は實權全く米人の手に歸して居る。

第一　上海—南京—九江—漢口—宜昌—萬縣—重慶—成都

第二　南京—徐州—濟南—天津—北平
第三　上海—寧波—温州—福州—履門—仙頭—廣州
の三線を完成し、更に漢口—長沙—廣東線及南京—濟南—天津線等擴張中である。

使用機數は約十七、八機、飛行士、機關士等米人十數名が居る。

一九三二年に於ては

旅　客　三、一五三人
貨　物　四八、〇一四封度

の業績を擧げて居る。

本航空會社は更にマニラに航空路を延長し、汎太平洋航空會社の米本國—マニラ間の計畫線に聯接せんとする計畫あり、既にマニラ—廣東間の試驗飛行を終つて居る。

二　歐亞航空公司

獨逸ハンザ航空會社と支那側との合辦であつて

第一　上海—南京—天津—北平—滿洲里（シベリヤ經由伯林）
第二　上海—南京—北平—庫倫（シベリヤ經由伯林）
第三　上海—南京—甘肅—新疆（シベリヤ經由）

の三線を計畫し目下著々事業擴張中である。

使用機數は五機、獨逸人六名の空中勤務員を使用し、一九三一年に於ては

旅　客　五八九人
貨　物　一一、三〇三封度

の業績を擧げて居る。

米　國

米國政府經營の航空は陸海軍以外に森林巡邏飛行（使用機數四二）及酒密造監視、國境警邏竝に天災に際し使用する若干の飛行機がある。

民用航空は頗る盛んで、一九三二年に於ける統計は

飛行機　約　一〇、六二六機
操縦士　約　一八、八〇〇人
公認飛行學校　一二〇校
規定航空路　四九、〇〇〇哩
飛行場　二、一三六（更に二千を増設する案を有す）
飛行哩數　四八、三四四、三五八哩
旅客　五〇四、五七五人
貨物　一、三二四、四二八封度
郵便　七、六五八、三三二封度

一九三三年度前半期に於ける統計は

飛行哩數　二八、八八九、三四九哩

旅客　二三七、〇九四人
貨物　一六一、七三四封度
郵便　四、二三九、〇二六封度

因みにフイリピンに於ける民間航空の情況は次の通りである。

	一九三二年度	一九三三年度前半期
商用飛行距離	一三四、八一六哩	一八〇、六八七哩
乘客數	一、六六二人	一〇、九四八人

英國

民用航空發達の爲め政府は年々多額の補助費を支出して居る。即ち

一九三二年度　五十六萬一千磅
一九三三年度　六十六萬三千磅

右の如き經費を投じて、毎年最短飛行哩四萬哩の實行を企圖し、又、既に英、印度間の定期航空路を開設し、又別に、支那に於ける航空路開拓を企畫し著々其の事業を進めて居る。特に注意すべきは、輕飛行機の發達競技を補助金を支出して（一九三三年度は二萬磅）奬勵して居ることである。

佛國

政府奬勵補助の下に著々と發達しつゝある。一九三一年度の補助豫算五億一千三百萬法。一九三〇年度に於ける統計は

飛行機	約	一、一〇〇臺
操縦士	約	一、一〇〇人
航空路	約	三九、〇〇〇粁
飛行距離	約	九、二三九、〇三五粁
旅客		二八、六七二人
貨物		一、五九一、〇七〇瓲

獨逸

獨逸は平和條約によつて軍事航空を全く禁止されて居る爲め從來民用航空には最大の努力を拂つて大いに其の成果を擧げて來たが、近時航空省統轄の下に各機關の組織を整へ更に航空及防空の一大躍進を企圖しつゝある。

一九三二年の統計は

航空路延長		一、一二五、四九三粁
旅客		九〇、六三〇粁
貨物		二、四〇〇、二〇九粁

伊太利

政府の補助豫算一九二六年度以降は年額一億リラを支出しつゝあつたが、一九三〇年度は六千百萬リラ、一九三一年度は七千百萬リラに減少した。

一九三一年度に於ける統計は

航空路延長　一八、一六〇粁

飛行距離　四、三九九、八七一粁

旅客　三三、六五〇人

貨物、郵便　七〇七、〇〇三瓩

大都市に對する空爆の威力

大都市に對する空中爆撃の例としては、世界大戰間に於けるパリ及ロンドンに對するものを擧げることが出來る。

大戰間獨逸のパリ空襲

年次	飛行機に依る			飛行船に依る		
	回數	死	傷	回數	死	傷
一九一四年	一〇	一一	五〇			
一九一五年	二	?	?	一		
一九一六年	一	二六	二八	二		
一九一七年						
一九一八年	一六	?	?			
合計	二九	二二六	六〇三	三		

大戰間獨逸のロンドン空襲

年次	飛行機に依る			飛行船による		
	回數	死	傷	回數	死	傷
一九一四年	二	—	—	—	—	—
一九一五年	四	二	六	二〇	二〇七	五三〇
一九一六年	一六	一八	六一	二二	二九二	七三一

一九一七年	三三	六五九	一、五五一	六	四〇	七五
一九一八年	八	一八二	四二三	三	一二	五九
合計	五三	八六一	二、〇四三	五一	五五一	一、三九五

ロンドン及パリに對する獨軍の空中爆撃は以上の通りであつて、爆彈落著地點の狀況は附圖第二、第三の如くであるが、彈痕の無數なると、空爆實施回數の相當多數なると に比べて、死傷者數が案外に少ない。之れは一にロンドン及パリに於ける建築物が優良であつて、特に多數の地下室、地下鐵道等の避難場所を有する爲めと、防空防火等の施設が良好であつた爲めと見なければならぬ。從つて、此の數字に表はれた結果を以て、東京、大阪等日本の大都市の場合を豫測樂觀することは甚しく危險である。

歐洲大都市と雖、將來戰に於て實現することあるべき更に猛烈なる空中爆撃に對して果して、過去の世界大戰に於ける程度の被害を以て對抗することが出來るや否やは大なる疑問である。何となれば、航空關係の異常なる發達は、其の空中爆撃の威力を著しく增大せしめつゝあるからである。況んや抵抗性弱き日本の大都市に於てをやである。

歐洲大戰當時に於ても、ロンドン及パリ等の市民は、敵の空中爆撃が及ぼした死傷者の實際數が豫想外に少なかつたにも拘らず、之によりて受けた精神上の脅威は誠に絶大であつて、婦女子の如きは爲めに病的神經衰弱の狀態に陷るものが多かつた有樣である。

「空中戰一九三六年」其他

吾人は、大東京の潰滅など悲しむべき將來戰を夢想することを、決して快しとするものではない。

然しながら、豫め理念に於て先づ將來の動向を豫察し、情勢を判斷して、以て實際に之に備ふるは、國家國民の責務であらねばならない。是れ孫子が「其の來らざるを恃(たの)むことなく、吾が以て之を待つあるを恃む。其の攻めざるを恃むことなく、吾が攻むべか

らざる所あるを恃むなり」と敎ふる所以である。

獨逸フオン・ヘルデルス少佐著「空中戰一九三六年」は、甚しく空想的な小說であるが前述のやうな意味に於て、歐洲兵學界に多大のセンセーションを捲き起した有名な書物であつて、佛、伊等、相爭つて之れが譯本を出版した。

ヘルデルス少佐は、一九三六年英佛兩國の開戰を舞臺として、英軍空中艦隊を以てするバリ爆擊を主題とし、ブラックレイ大佐なる人物を描いて、其の空中艦隊建造に對する涙ぐましい努力貢獻と、右空中艦隊を率ゆる同大佐の英雄的指揮振りとを、誠に興味深く綴り込んで居るが、單に小說的興味ばかりでなく、軍事的觀點からしても、甚だ多くの敎訓を含んで居る。

就中、右空中艦隊は、著しく進歩したる最新技術の優秀なる九人乘の大型機を以て編成せられ、各機は機關銃彈に對して火災を避くる爲め、揮發油を用ふることなく、重油エンジンを採用し、消音裝置を備へつけ、遠心式過給器を以て高射砲彈の屆かぬ高空の

飛翔を可能にし機關銃の外に速射機關砲を備へ無線通信其他を完備して居る。其の密集せる編隊は、敵機に對し銃砲火の火制によつて僚機相扶け、敵飛行隊の攻擊を見事に擊破する。眞に空中無敵艦隊である。此の空中無敵艦隊が佛國の强硬なる最後通牒的覺書が英國政府に到著した其の日の夜半、早くも英國飛行場を發して巴里急襲に向ひ、二個大隊を別働隊として分進させ、主力本隊は合計百九十機、十個大隊の大群を間隔十二粁の二縱隊に竝べて、ドーバー海峽を越えて一路急進し、敵空軍の妨害を排擊しつゝ翌日早朝、見事にバリを爆擊し、大爆彈の外に、毒瓦斯彈や、幾千發とも知れぬ二十五瓩テルミット燒夷彈を投下して、巴里全市を潰滅し、歸路更に敵の强大なる空軍の肉迫を打ち破つて、悠々と英本國に歸來するのである。其の著想の非凡にして而も科學的實現性に基礎を置く構想の飛躍振りは、確かに將來戰の空中爆擊と新式爆擊飛行隊の建設とに一つの指針を與ふるものであると謂ひ得る。ヘルデルス少佐は小說中に於て曰ふ

「火事を起し、瓦斯攻擊を受けた大都市に對して、二、三千の消防夫に何が出來るか？

幾萬の消防軍でも、僅かに其の場の危急を救ひ得るに過ぎない」と。

目下列強の有する爆撃機が、未だ此の小説中の空中艦隊の如く、其の質に於て技術的優秀性を獲ち得て居ないことは確かであるが、駸々として進歩をやめぬ空軍の將來に、空中艦隊を以てする大都市爆撃が可能なる戰法として豫約されて居ることだけは、爭へぬ大事實であらう。**國防の將來は正しく空に在り**と斷言することが出來る。

佛國ロゼル・ブリック氏著「一九四〇年の空中戰」は、ロシヤの空軍が優秀なる爆撃機を以てするバリ空襲と、之に對する佛空軍の奮闘とを主題とするものであるが、此の小說中に出て來る飛行機は、特種の過給器を備へて一萬五千米の高空を飛翔し、六百粁の時速を有する素晴しい劃時代的なものである。其の搭載爆彈は五瓲の爆彈百個であつて、絶對に消火し得ぬ幾多の火災を惹起するを以て目的として居る。著想は大體に於てヘルデルス少佐のものに似て居ると見てよろしい。

又、昨年一月號伊太利リビスタ・アエロナウチカ紙に掲載せられたロンドン空襲の豫想によると、英佛戰爭を假想し、開戰劈頭、輕爆二隊、重爆三隊（一隊は三十機より成る）は、掩護驅逐隊五中隊（中隊は三十機より成る）の協同援助によつてドーバー海峽を越えて五方向からロンドンを空襲し六千米の高空から燒夷彈二十五噸、爆彈六十噸の總量を投下して居る。是に對し英國の高射砲は其の效力なく、又英軍飛行隊の活動も其機を失し、ロンドンに對する佛軍の空爆を成功する。と云ふ風に構想して居るのである。

然るに飜つて、蘇聯邦陸軍大學校高級指導官ラプチンスキイ著「航空戰術」に於て彼が述ぶる所を見るも、順調に發達せる空軍が其の編制上保有しなければならぬ要素の一つとして、獨立行動可能なる重爆撃飛行隊を擧げて居り、又、蘇聯邦が現在頻りに優秀巨大飛行機の整備を急いで居ることに思を致しても、空中戰指導の將來に對する蘇聯邦當局者の方寸の一端を想像するに必ずしも難くないであらう。斯くて我が空の國防は將來益々多難であると謂はなければならぬ。

攻撃せざる者は撲滅せらる

上述のやうな航空の偉大なる發達と、之に依る都市の空中爆撃等近代的攻撃に對しては、或は高射砲により、或は阻塞氣球によつて防禦するとしても、到底完全には防衛しきれない。殊に優秀機を以て高射砲彈や阻塞氣球の屆かぬ高空から襲來するものに對しては、如何とも手の出しやうがないのである。

或は夜間の燈火管制により、或は上空に煙幕を張つて都市を隱蔽するとしても、海面に連接する大都市や、山脈、河川等により方角を判斷せられ得る都市に在つては、之によつて爆撃より免れる期待は甚しく薄い。從て東京、大阪等日本の大都市は空襲に對する抵抗力は甚しく弱い。

茲に於て空中よりする攻撃に對しては、我も亦飛行部隊を以て空中に於て之に對抗するを絶對必要とするのである。而も攻者の爆撃飛行隊は、動もすれば防者の驅逐飛行隊の活動を排撃し、或は其活動の隙を拔けて、爆撃目標の上空に侵入し易い。殊に自衛力強大なる大爆撃飛行編隊に於て益〻然りである。故に防空の最良なる方法は自ら進んで先制の利を收め、機動によつて敵を撃滅するにあらねばならぬ。之が爲めには常に敵に優る空軍の充實を計り、機を失せず敵の機先を制して敢然として攻撃を斷行しなければならない。寸刻の遲速は以て國運の分る〻所となることを忘れてはならないのである。

「空中戰一九三六年」の小說が出版された際、獨逸國防雜誌は、著者ヘルデルス少佐が小說中の人物ブラックレイ大佐をして、內閣諸公の群議を排して決然として、ロンドン空襲を即夜敢行させて居る點を激稱して曰はく「由來、攻撃せざる者は、撲滅せられるのである」と。茲に國防の第一義が存在する。

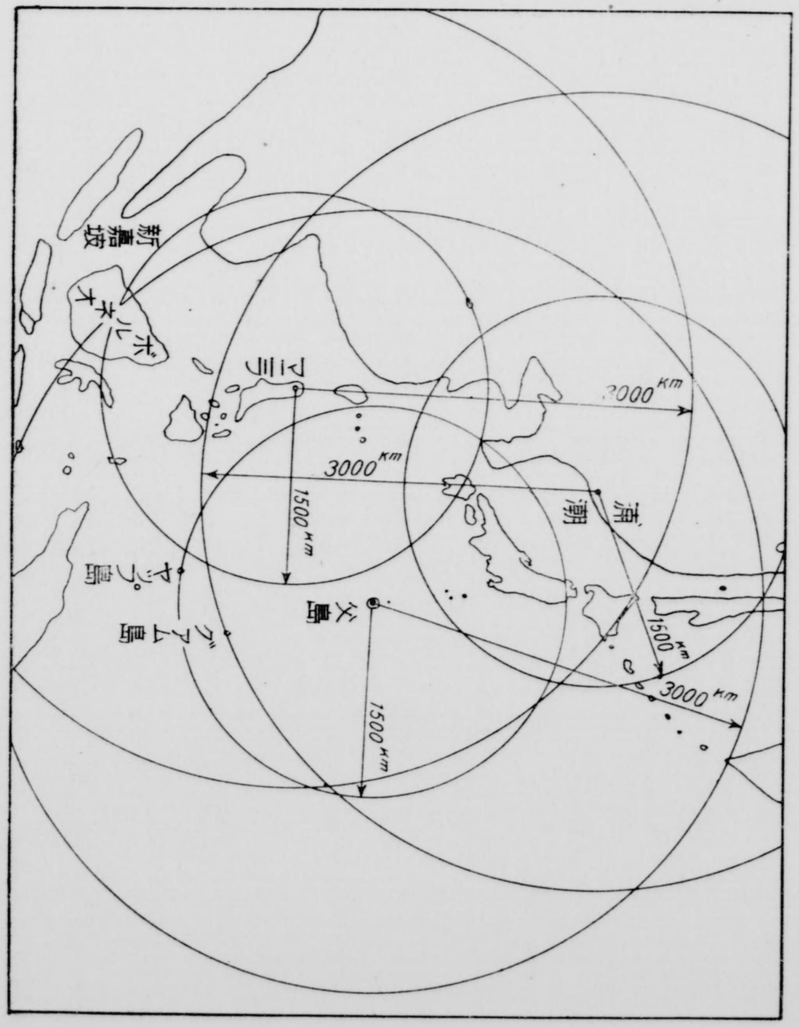
古來、戰史の證明する所、概ね、止つて敵を防ぐ者は敗れ、進んで敵を攻むる者は勝つて居る。殊に空中戰の戰勝は常に、機先を制して敵を其上空より壓する者の手に握られて居る。

皇國空の國防を完うする爲めには、充實したる航空兵力の整備を必要とする。殊に近代空中戰の本質上、飛行諸部隊の人員器材等を平時より充足完備して寸刻の遲滯もなく

機に臨んで行動するを可能ならしむる如く用意することが肝要である。之れが爲めには驚くべく多額の經費を要することは勿論であるが、列强航空武力の駸々たる發達に鑑みて、皇國も亦、後れ馳せながら、辛うじて列國に追隨し得る程度の整備を爲す爲めの負擔は、國民として之を甘受しなければならないであらう。此程度の整備の爲めにも日本は今後更に一層の奮發努力を要するのである。

尙ほ又、空の國防力を經濟的に充實する爲めにも、將た又、國民の經濟文化生活を向上する爲めにも、我が國としては成るべく速に民用航空の大々的發展を企圖することが肝要である。

徑半動航機撃爆　一第圖附



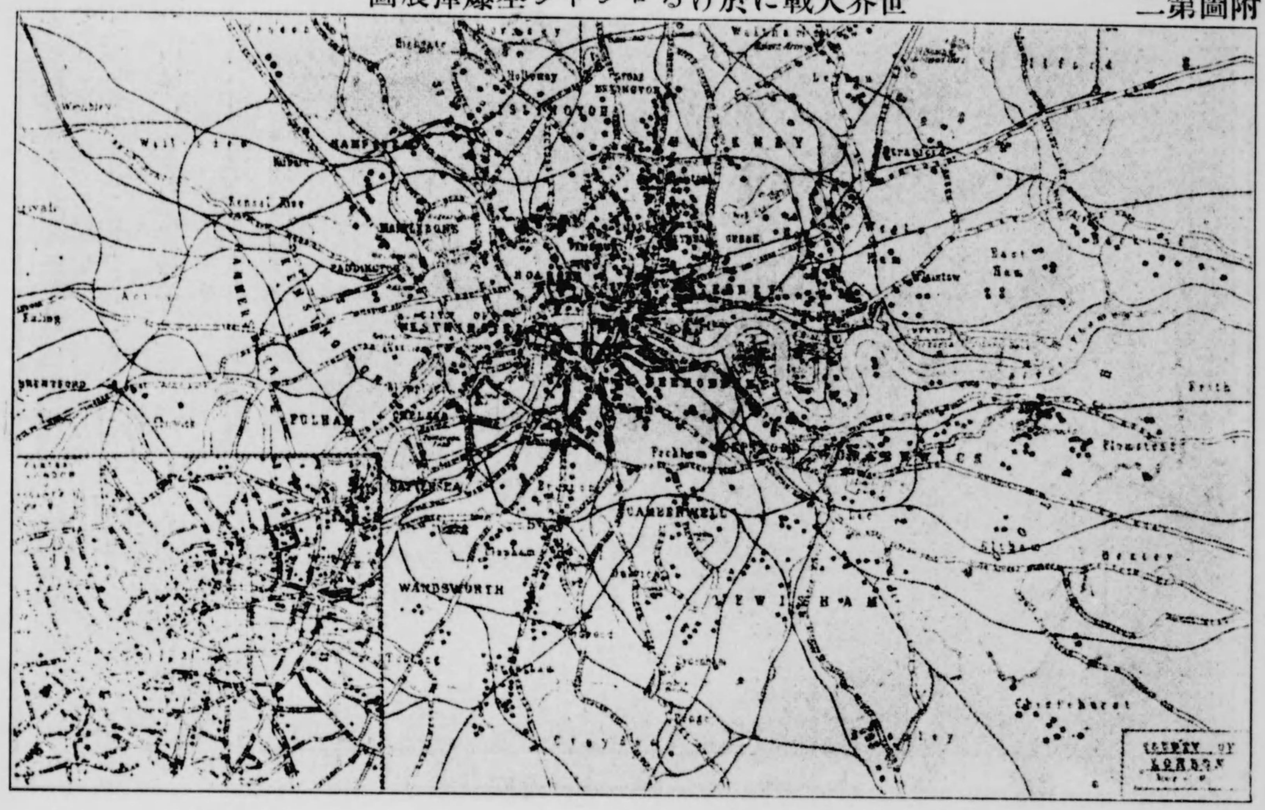
備考

一五〇〇粁＝爆彈一〇〇〇瓩を搭載し其を敵地に投下し、其の根據地に歸還し得る場合

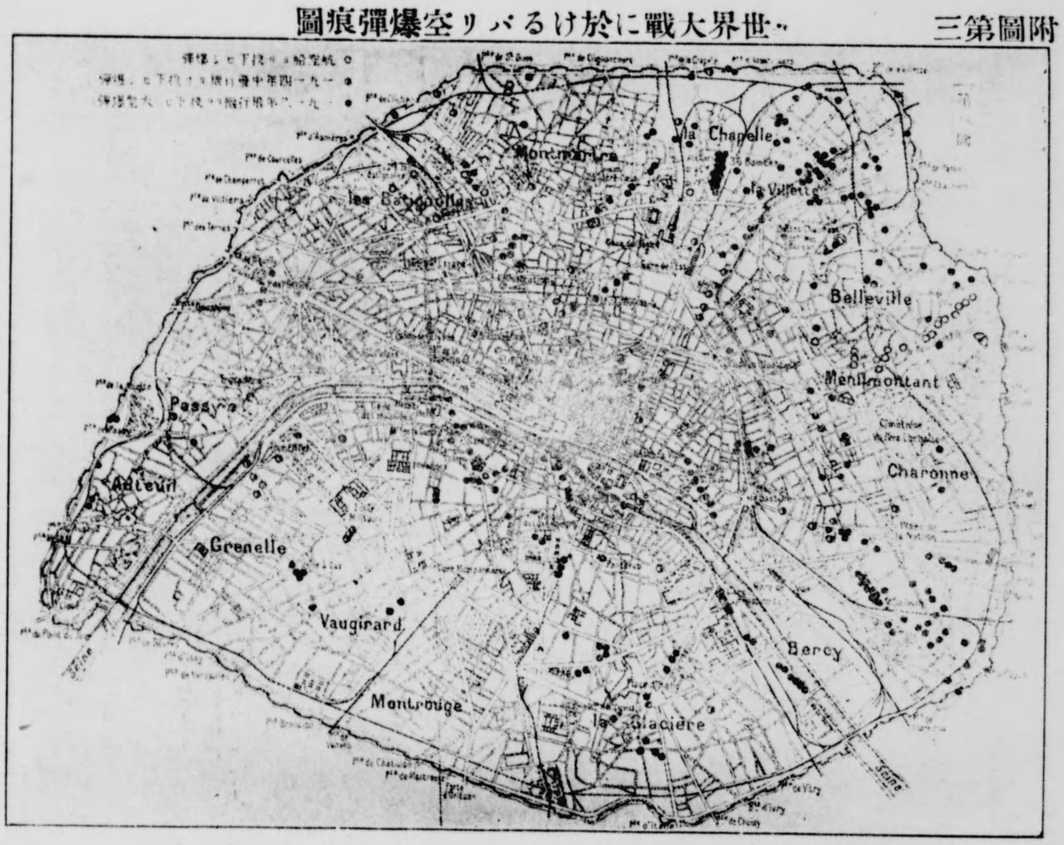
三〇〇〇粁＝爆彈一〇〇〇瓩を搭載し生還を期せずして活躍する場合

（實際の使用に方りては爆彈投下に要する時間を考慮せざるべからざるを以て航動半徑は若干短縮せらる）

附圖第二　世界大戰に於けるロンドン空爆彈痕圖



附圖第三　世界大戰に於けるパリ空爆彈痕圖



18
999